

# 研究紀要

平成25年度  
第37号

静岡県博物館協会 研究紀要 第37号

静岡県博物館協会 研究紀要 第37号



静岡県博物館協会

静岡県博物館協会  
研究紀要

第37号 / 平成25年度  
表紙 / 富士山禪定圖 富士市立博物館蔵

目次

2	静岡近代美術年表稿 昭和戦前編 4	立花 義彰
22	取藏品紹介 木版手彩色「富士山禪定圖」にみる富士山南麓の信仰空間	富士市立博物館 井上 卓哉
32	平成25年度静岡県博物館協会地域セミナー事例報告 磐田市旧見付学校「昔の授業体験」	磐田市教育委員会文化財課 高畑 裕美
36	平成25年度静岡県博物館協会地域セミナー事例報告 学校と美術館の連携 -浜松市中学校美術部夏の写生大会を例に-	公益財団法人平野美術館 松井 沙代子
40	平成25年度静岡県博物館協会地域セミナー事例報告 富士山ネットワーク20周年記念事業の成果と展望	富士市立博物館 藤村 翔

編集・発行  
静岡県博物館協会(事務局)  
〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
静岡県立美術館  
電話・054-263-5857 FAX・054-263-5742

デザイン タツマキチューン  
発行日 2014年(平成26年)3月31日  
印刷 文光堂印刷株式会社



## 静岡近代美術年表稿 昭和戦前編 4

立花 義彰

この年表稿は、『静岡県博物館協会紀要』第34,35,36号所収『静岡近代美術年表稿 昭和戦前編1,2,3』の続きで、昭和16年から20年までを対象としている。

「静岡近代美術年表稿明治編」中の僅かな記述への着目から、竹内久一作《掛川戦勝観音像》[旧戦勝観音像]についての論考(註1)が生まれ、県内近代彫刻の黎明期に光を当てるものとなったが、今回拙論では、その近代彫刻の終焉ともなりかねなかった戦時金属供出期の、珍しくも興味深い建立の事例である保田龍門作《吉田松陰像》(現存・下田市柿崎三島神社境内)を採り上げて導論とする。

同像に関する先行研究としては、坂本雅子「保田龍門作《吉田松陰形像》」及び平成11(1999)年の屋外彫刻調査保存研究会シンポジウム発表がある。(註2)

拙論では、今回の年表稿編纂で新たに見つけた諸新聞記事を基に、坂本ならびに同会での調査成果を補い、杜撰にして無味乾燥極まりない本年表稿活用の一例としての論考を自ら拙くも試みることにする。

本作品は下田市の現在地に昭和17(1942)年建立されたもので、県指定天然記念物の「偽層」と呼ばれる崖を背景として、高3.6メートルの台座に立つ、高3.3メートルの巨像で、セメントに黒く塗装された像は、両手で太刀を地に突いて立ち遠くを眺めるかのような像容を示し、その構築的な造形には、偉人の像に期待された偉大さ勇壮さが遺憾なく表わされている。

作者保田龍門(明治24(1891)-昭和40(1965))は、和歌山県生れの彫刻家で、本名重右衛門。初め洋画を志し東京美術学校西洋画科へ入学し二科文展に入選。日本美術院彫刻部で彫刻を学び、1920-23年米仏に学びフランスでプールの(Emile Antoine BOURDELLE 1861-1929)に師事した。プールのは、師であるロダンの作風から離れ面と量の構築性を追及し静謐で精神性に富んだモニュメンタルな作風を展開した彫刻家。《アポロンの首》《アルヴァール将軍記念碑》《弓を引くヘラクレス》等の作品で知られる。保田は構

築性の強い師の作風をよく消化し、帰国後は大阪に住み院展等に出展。戦後は東京への出品を絶ち関西彫刻界を指導した。(註3)

像主の吉田松陰(天保元(1830)-安政6(1859))は、幕末の尊王論者・思想家。長州藩出身。安政元(1854)年アメリカのペリー来航にあたり密航を企てたが失敗し萩で獄につながれた。翌年出獄し、自邸内に松下村塾を開き、高杉晋作、久坂玄瑞ら尊王攘夷運動指導者多数を教育。門弟らの明治維新に与えた影響力は大きい。安政の大獄により刑死した。

吉田松陰イメージの変遷には、1.革命家としての松陰像、2.憂国忠臣の松陰像、3.教育者としての松陰像、4.忠君愛国の松陰像、そして最後に滅私報國的“松陰主義”としてのイメージがあるとされている。(註4)

1.の革命家としての松陰像形成には、徳富猪一郎[蘇峰]著『吉田松陰』(明治26年刊)の功績が大きい。2.の憂国忠臣の松陰像も同著作と、明治41年の改定本『吉田松陰』、明治42年の帝国教育會編『吉田松陰』の影響が大きい。3.教育者としての松陰像とは大正7年以降の『尋常小学校修身書』に取上げられた影響であり、4.の忠君愛国の松陰像も昭和8年の教科書によるものであろうから、建立への地元教育会の関与には、教育者としての松陰像のイメージが多分にあったと考えられる。

しかし、当初澤田政廣に依頼し完成を予定した昭和8年の銅像計画は、台座のみが出来上がったところで挫折。(註5)昭和11年に建設運動を再開(註6)し、昭和13年には具体化して、保田龍門に制作を依頼する事となる。(註7)

これらの紆余曲折を経て、昭和15年に試作(マケット)が完成(註8)、昭和17年原型完成(註9)と、遅いペースでの建立計画中には、先に述べた松陰イメージの変化の他、銅の使用制限令と像の供出といった、社会思潮の著しい変化があり、完成作は銅像ではなくセメント像となった。

昭和17年10月27日完成除幕式を挙行。(註10)その除幕を伝える記事では教育者としてよりも愛国者の像として語ら

れており(註11)時代の雰囲気をよく伝えている。

昭和20年の敗戦は、この《吉田松陰像》が依拠していた処の戊辰以後の歴史観による維新の憂国忠臣・忠臣愛国者としての聖性を相当に損なう事ともなり、戦後はあまり注目を浴びる存在ではなくなった。

しかし、昭和49(1974)年の地震で損傷しながらも、幸い現存する本作品は、先行研究の指摘する通り、師事したプールの《アルヴァール将軍記念碑》の四体の立像からの影響が認められる(註12)と共に、プールの構築的な作風をよく吸収した作者自身の力量が遺憾なく発揮された傑作であると言える。また戦後盛んとなるセメント彫刻の先駆的な例としても貴重であり、更にその事は、同時に本作が、伊豆出身の作家達のセメント彫刻を以って始まった戦後県内彫刻の直接の祖であるとも言えよう。

本来本作品は、“青銅時代の終焉”に建立されかつ現存する、希少でしかも極めて質の高いモニュメントであり、日本の近代史及び近代美術史からもより評価されるべき作品である。また地域の歴史を伝える非文献的史料としても興味深い存在である。

竹内久一作《日蓮聖人像》が福岡市の文化財になっているのに対し、同じ作者の掛川《平和観音像》が未指定のままである事に示される様に、本稿で取上げた本作を含む県内近現代彫刻への一般の評価認識は不当に低い。

今後保存の方策を考えるべき屋外彫刻の一つである本作について論じ、史料性が高いと思われる記事を再録し、一連の計画の推移変遷の史的復元を試みた。なお、掛川の竹内久一作《平和観音像》については、註記1の諸論考を参照されたい。

註

- 田中修二「竹内久一と掛川市の《平和観音像について》」藤曲隆哉「竹内久一《平和観音像》の原型と構造」黒川弘毅「《平和観音像(旧:戦勝観音像)》の保存状態について」大野春夫「掛川《平和観音像》台座の状態について」拙論「竹内久一《平和観音像(旧:戦勝観音像)》について 建立の歴史的経緯と本作調査の意義」
- 「屋外彫刻調査保存研究会会報」5号 平成25年
- 坂本雅子「保田龍門作《吉田松陰形像》」『屋外彫刻調査保存研究会会報』2号 平成13年
- 前掲註2

- 田中彰『吉田松陰』中央公論社 平成13年
- 『東京日日新聞』静岡1,2版 昭和8年9月22日、『駿遠豆』9-8,12-4,『静岡新報』昭和9年2月18日,7月11日,昭和10年12月5日,『静岡民友新聞』昭和12年2月24日
- 『静岡民友新聞』昭和11年6月13日,21日,昭和12年2月24日
- 『東京日日新聞』静岡版 昭和14年7月25日,『静岡民友新聞』昭和14年7月26日
- 『東京日日新聞』静岡版 昭和15年2月14日
- 『読売新聞』静岡版・遠州版昭和17年6月7日
- 『読売新聞』静岡版・遠州版 昭和17年10月28日
- 『読売新聞』静岡版・遠州版 昭和17年10月25日
- 前掲註2

## 資料1:《吉田松陰像》略年表

○内の数字は後掲再録資料番号

- 昭和8年  
9/ 澤田政廣に吉田松陰像制作の依頼。①
- 昭和9年  
7/9 《吉田松陰像》起工式於下田。③
- 昭和10年  
12/2 吉田松陰像建設協議会於下田役場。  
(新報12/5)
- 昭和11年  
6/ 《吉田松陰銅像》建設運動再開。④⑤⑦
- 昭和14年  
7/ 賀茂郡教育会、保田龍門を吉田松陰像制作者に決定。⑧
- 昭和15年  
2/ 保田龍門《吉田松陰像》試作完成。⑩⑪  
7/26 保田龍門、下田にて《吉田松陰像》打合せ。
- 昭和16年  
5/ 保田龍門に吉田松陰金子重輔大理石レリーフ依頼。⑫
- 昭和17年  
6/ 原型完成(⑬⑭)  
10/27 保田龍門《吉田松陰像》除幕式⑮⑯
- 昭和49年  
5/9 伊豆沖地震にて損傷。
- 昭和56年 下田市へ移管される。
- 平成10年 太刀部分の補修。
- 平成11年  
3/6 屋外彫刻調査保存研究会シンポジウム。⑰

## 資料2:新聞記事に見る保田龍門《吉田松陰像》

## ①「下田付近に松陰の銅像 建設計畫すむ」

「熱海町熱海ホテル山本政治氏等は吉田松陰會後援會を組織し齋藤首相以下朝野の名士を賛助員として五萬圓の寄付をつり下田町と蓮台寺の間の小富士壱萬坪の土地内に吉田松陰の銅像建設計畫中だつたが一兩日前銅像を熱海町出身の彫塑家澤田寅氏に依頼した。台石は高さ一丈八尺、銅像は一丈三寸で野袴を穿ち荷物をハス掛けに背負ひ松陰下田入りの姿をそのまま現すものである。なお同所に松陰神社及び記念會館をも建設するので豫定の五萬圓では不足のため後援會で寄付の追加をする筈」(『東京日日新聞』静岡1,2版 昭和8年9月22日)

## ②「柿崎へ建設の松陰銅像」

「賀茂郡濱崎村柿崎へ建設する吉田松陰の銅像は三月末竣成の豫定だが、寒中銅像に脚が入ったため豫況遅れる模様である」(『静岡新報』昭和9年2月18日)

## ③「柿崎に建設さる松陰の銅像 きふ盛大に執行」

「賀茂郡濱崎村柿崎三島神社内へ建設する吉田松陰銅像起工式は九日午後一時、舉行神官の祝詞に続き(略)玉串を奉呈厳かに行はれた。銅像は五間四方で其下を五尺に掘り下げ土台は花崗岩で畳み銅柱は四方が銅板で「吉田松陰先生銅像」を金字で現はし、其上へ左右に紋章を彫刻、銅像は長さ十尺、地上からの高さは十五尺である工費は二萬五千圓といふが工事は年内はかかり大島組は餘程の犠牲だといふ。」(『静岡新報』昭和9年7月11日)

## ④「志士松陰の銅像下田武山へ 松陰會の不甲斐なきに別方面の有志起つ」

[下田發]下田開港に由緒深き吉田松陰先生の銅像をその昔先生が密航を企てて果たさなかつた伊豆濱崎村柿崎海岸弁天島の附近に建設するべく下田町の清田賢次郎氏を會長とする松陰會では全国に呼びかけて募金したが中間に介在するインチキ漢の喰物にされ銅像どこか土台が未完成の内の金はつきその収支さへ全く不明のまま一切の責任は病魔のため身體の自由さへ歎く清田會長にナすりつけ姿をくらまして仕舞つたので地元でも少なからず問題とされ土地の名誉のためにも完成しなければならぬと隣接六ヶ町村でよりより協議を進みてはみるが何分にも先立つものは金殊に

前者の跡始末一切を引き受ける事は並大抵の仕事でないので摺つた揉んだでなかなか埒あかず、果てはその位置も金を多く出した町村へ移しても良いなどといふ話まで出て来る騒ぎ。こんな事では何時になつたら松陰先生の銅像が出来る事やら誠に心細い次第。この不甲斐ない有様に憤慨する一部有志間には何とかして我々の手で各町村が成し得ないこの大事業を完成させ度いと寄々秘策をねつてゐるが場所も金高で云々するようなケチな考へを捨て下田湾を一望に収め海から來ても陸から來ても一目でわかる様に武山の頂上に行く行くはケーブルカーを設けて遊覧地帯とするといふのであるが、至極妙案ではあるがこれがためには相當有力者の援助をまたなければ實現不可能とあつて種々奔走中であつたところ略目星もついたらしいので或いは急速に實現を見るのではないかと噂されている。」(『静岡民友新聞』昭和11年6月13日)

## ⑤「松陰銅像建立 南豆町村長が上京して」

[下田發]下田開港先賢吉田松陰先生の銅像建設が松陰會の手により計畫されたが半途にして挫折放り出されたままになつてゐるのを遺憾とし一部有志間に再建運動が勃發寄々協議を進められてゐることは既報に通りであるが十七日下田町役場に南豆六町村長、保勝會役員他有力者三十餘名が參集熟議の結果従來の六ヶ町村保勝會で松陰會□□踏襲案を放棄し有志の再建運動を支援することに意見の一致を見たので下田町池野正男氏が東京方面有力者筋へ資金調達準備工作のため十八日上京したが同氏の運動が奏効するにおいてはこれが援助の南豆六ヶ町村長も大舉上京する筈で問題の松陰銅像建設運動もいよいよ表面化するに至り各方面の注目を集めてゐる。」(『静岡民友新聞』昭和11年6月21日)

## ⑥「吉田松陰の記念碑 由縁の下田に建設運動」

「松陰吉田寅次郎が憂國の至情から同土金子重輔とともに伊豆下田港に停泊中の米艦に乗り渡米せんと計つて果さず遂に幕吏に捕へられ拘禁された由縁の地、伊豆下田町下田高女前廣場に松陰の記念碑を建立すべく地元有力者間に着々計畫が進められすでに敷地が決定、今年中に實現の運びとなる筈である。先には松陰が米艦に乗らんと機を待つた傳へられる下田在柿崎弁天島の近く三島神社境内に松陰銅像計畫が進められ、二、三千圓の寄付金が集まりその台石も出来たが、その間に奔走した或者のために遂に

銅像が完成せず徒に台石のみが風雨にさらされて心ある人を憂ひしめてゐる折としてその實現は期待されている。」(『東京日日新聞』静岡版 昭和14年5月5日)

## ⑦「吉田松陰の銅像 由縁の下田に建立 明年、賀茂郡教育會で」

「賀茂郡教育會では去五月以来三回にわたる委員會を開催、二千六百年記念事業につき協議の結果、吉田松陰の銅像を一萬五千圓の豫算で明年度中に建立することになり来る廿八日の校長會議で正式決定する。場所は松陰が海外密航を企て機をねらつてみた柿崎弁天島または下田波止場付近で、これが製作には堺市在住の彫塑家保田龍門氏に依頼する豫定で、氏は松陰崇拜者でかつ松陰門下の大和の國儒、森田節齋が當時氏の家に寄寓、晩年を終へたといふ由縁があり、これが製作は単なる記念像とするよりも昭和の美術品としても後世に残すべく下田並に山口縣下を歴訪して研究の上製作に當ると意気込んでゐるといはれ二千六百年を記念する最大の記念事業として注目の的となつてゐる。なお資金は郡教育會で八千五百圓、他六千五百圓は縣内及び山口、東京方面から募集する。」(『東京日日新聞』静岡12版 昭和14年7月25日)

## ⑧「吉田松陰の銅像 下田在柿崎に建立 賀茂郡教育會の企て」

[下田]賀茂郡教育會では皇紀二千六百年教育勅語下賜五十周年記念事業に關し今春來委員會を開き協議中の處南伊豆に由縁深き吉田松陰の銅像を下田在柿崎に建立する事に意見一致を見去十九日の小委員會において大體左の通り具體方針を決定いよいよ明年秋までに竣工の豫定で着手することとなつた。即ち經費は教育會據出と一般寄付に俟つ事とし教育會から八千五百圓、一般寄付に六千五百圓、計一萬五千圓を以つて建立する豫定で、差當り一萬圓は一時借り入れて經費を支辨し金の纏り次第これを返却する事とし若しこの豫算で不足を告ぐ場合は會員の拠出年限を延長して増額□當外に會員は俸給の二百分の□を調□費として據出するもので一般寄付は縣内は青中小學校児童生徒徒から一人一錢以上、教員から十錢程度を目標に 縣外山口縣、東京方面からは青中小學校児童□徒一人五錢以上を標準として募る方針で建立費の内譯は型造製作費六千圓、鑄造費二千五百圓、礎石費三千圓、雜費二千五百圓、計一萬五千圓これが製作には松陰門下生森



田節齋氏が永眠して由縁の堺市保田龍門氏を煩わす筈で再三計畫されてまだ實現されないでゐる松陰先生の銅像もいよいよ賀茂郡教育會の手で實現の運びとなつた。】(『静岡民友新聞』昭和14年7月26日)

#### ⑨「吉田松陰の銅像 近衛さんも賛助 賀茂教育會の計畫進む」

「賀茂郡教育會の二千六百年記念事業吉田松陰銅像建設計畫はその後着々進み、すでに東京方面では近衛文麿公、徳富本社社資が賛助員を快諾し、更に丸尾會長は先頃製作者保田龍門氏と山口、大坂方面を歴訪、山口縣萩市では厚東常吉縣議が大阪では府立修徳學院院長熊野隆治氏が募金運動に積極的活動を引き受け豫定以上の大規模な銅像が建設され得るものと期待されてゐる」

(『東京日日新聞』静岡・遠州版 昭和14年10月31日)

#### ⑩「松陰銅像試作出来る」

「賀茂教育會が二千六百年記念事業として着手した吉田松陰銅像建設運動は最初一万五千円の豫算であつたが時宜を得たものとして近衛首相、木戸侯をはじめ本社社資徳富翁、増田次郎氏等、政、財界の諸名士欣然賛助を寄せ、大阪方面では『みかえりの塔』の編者府立修徳學院熊野隆治氏が盡力更に松陰の故郷山口縣下各小學校では郷土の生める偉人の銅像がその思ひ出の地に建設せられるとあつて續續寄附計畫は擴大して五万円となり、一丈二尺の銅像二万円(銅入手まで便宜的に塑像を建立、銅購入費は蓄へ置く)記念館一万五千元(六十坪の建坪で松陰關係の文書類を集め修養道場並びに青年の簡易宿泊所となす)敷地費一万五千元その他となり地元町村長及び黒船協會も後援を申し出て漸く本格化し銅像製作者保田龍門氏は松陰の遺跡を訪れて得たインスピレーションで第一試作の塑像を製作、郡教育會に寫眞を送つて來たので同會では全国的に募金に乗り出すこととなつた」(『東京日日新聞』静岡12版 昭和15年2月14日)

#### ⑪「吉田松陰の銅像愈々柿崎に建設完成は明年六月頃」

賀茂郡教育會が二千六百年記念事業として下田在濱崎村柿崎三島神社境内へ建設する吉田松陰銅像建設費は他力本願ではあるが教育會が死に物狂ひに募集した結果大部分寄付金を完了したので二十六日京都から銅像作者保田龍門氏がやつて來て、いよいよ教育會と眞契約が成立

手打が出来た。松陰銅像の工費は一萬八千圓人間修業を積つた保田氏が心血を絞つて千載に残さうとする松陰の銅像は國寶的なものに価値づけられるであらう。現に龍門の手に成るものとしては國寶的に擬せられてゐる大阪の吉岡訓導があり、縣内には故角谷靜師校長の銅像などがある。(『静岡新報』昭和15年7月30日)

#### ⑫「柿崎弁天に先賢の浮彫群像 松陰銅像建設に協賛の雨」

「伊豆下田港に吉田松陰銅像建設計畫は賀茂郡教育會の手により近衛首相、本社社資徳富蘇峰翁等名士の賛助下に進められ今年十月完成を見る豫定だが、更にこれに加へて銅像建設地の近く柿崎弁天の松陰等が米艦を望んだ岸壁に松陰と金子重輔の群像大理石レリーフ寄贈を大阪市大正區北泉尾町の大井治助氏から郡教育會に申し出た。銅像の作家保田龍門氏に一切を委嘱し郡教育會の名で建設されるもので錦上花を添へるものとして關係者一同感激してゐる。レリーフの大きさは四圍と均衡のとれたものが作られる豫定で保田氏が現地視察の上決定するが大井氏は同時に銅像建設費に一千円の寄附をなした。なほ匿名となつてゐるが既報の蓮台寺温泉吉田松陰寄寓の家保存に私財提供を申し出た人も大井氏そのひとであるといはれ、また神戸市日進海運商會社長辻村善治郎氏は先頃教育會を訪れ銅像建設費が十分なら除幕式の費用を負擔させて下さいと申し出たほか小磯大将を賛助員として紹介し饒村慈齋醫博も賛助を申し出た。」

(『東京日日新聞』静岡版 昭和16年5月15日)

#### ⑬「さながら生けるが如し 吉田松陰銅像の原型成る」

「賀茂郡教育會の吉田松陰先生銅像建立事業は近衛前首相、松岡前外相、平沼男、徳富蘇峰翁等の賛助を得て完成を急いでゐたが大阪の保田龍門氏に委嘱した高さ一丈一尺の銅像原型が数日前出来上つた六月一杯には銅像が完成。十月廿七日の松陰先生命日迄にはゆかりの下田港柿崎に建立のはこびとなつた。(寫眞は出来上つた模型と製作者保田氏)」

(『読売新聞』静岡版・遠州版 昭和17年6月7日)

#### ⑭「下田港に松陰の像 命日の十月廿七日に除幕式」

「賀茂郡教育會では一昨年紀元二千六百年記念事業として徳富蘇峰翁近衛公初め名士の賛助を求め吉田松陰の

銅像を下田港柿崎に建立することとなり全国の學校から寄附を募る一方大阪市の保田龍門氏に委嘱、銅像の製作を急いでゐたがこの程原型が出来上つた。高さ一丈一尺の立派なもので都合により陶像にする模様だが松陰の命日に當る十月廿七日に除幕式を挙げる豫定」

(『東京日日新聞』静岡1.2版 昭和17年6月9日)

#### ⑮「仰ぐ松陰先生の像 由縁の下田で廿七日除幕式」

「黎明日本の先覺者吉田松陰先生の陶像は命日の明後廿七日午後一時より下田港柿崎に名士、地元民、各種團體、學徒五千が參列盛大に挙行される。この陶像は賀茂郡教育會が皇紀二千六百年を記念し賛助員に頭山滿翁、近衛公、松井、小磯兩大将、木戸侯爵等十二氏を仰ぎ足掛け四ヶ年、總工費二萬五千圓で竣工したもの。建設場所は安政元年三月廿七日眞夜先生が弟子金子重輔と共に黒船さして小舟を押し出した因縁の柿崎辨天島に近接した郷社三島神社境内の老松の見事な一角で臺石を含む像の高さ二丈七尺、像の高さ一丈一尺、重量六百貫、かつて敵國米國が日本最初の足跡を印したこの地にいま日本刀を腰にカツと太平洋の彼方を睨めすゑた姿は宛ら大東亞戦争完遂の日本國民の固き決意の表徴でもあり、作者保田龍門氏畢生の力作である總御影石張りの臺石中央に刻まれた黒御影の頭山滿翁揮毫の題字「吉田松陰像」と松陰先生の遺墨がこの陶像を飾つてゐる。なほ除幕式當日は賀茂郡教育會では功勞者として山田松允博士、日本精神顕彰會會長原園純秀氏、無報酬で基礎工事を指揮した下田町の鈴木芳藏氏外數氏へ感謝状を贈呈するが寢食を忘れ東奔西走した郡教育會長土屋泰作氏(下田國民學校長)の勞も感謝されてゐる。[寫眞は松陰先生の陶像]」

(『読売新聞』静岡版・遠州版 昭和17年10月25日)

#### ⑯「カツと睨む太平洋 由緒の下田に松陰先生の巨像 盛大に除幕式営まる」

「黎明日本の先覺者吉田松陰先生の胸像除幕式は先生の命日に當る昨廿七日午後一時から縁も深い下田港柿崎で厳かに執行された。松風と波音に靜かに明けはなれる三島神社境内には早朝から先生を慕ふ地元民を初め各種團體、學徒など約三千名參列、來賓として縣知事代理福島賀茂郡地方事務所長、湊海軍病院院長柴田少将代理、原園日本精神顕彰會々長、杉村日進汽船社長、本社診療所長山田尚允博士賀茂郡下の全町村長、各種團體長など名士八

十人餘列席、定刻一時開式、國民儀禮、國歌奉唱、修祓の後地元の可愛い幼児が力まかせに幕の紐を引けばさつと落ちた白布の後にさながら生あるが如く一丈一尺、黒磨きの松陰先生の巨像がかつとばかりに遙か彼方の太平洋上を睨み据ゑた、一億國民完勝の決意にも似たその雄姿に參列者は齊しく黎明日本の先覺者の崇高な姿を偲んで感無量、かくして式は型の如く進み、胸像建立に功勞あつた山田博士ほか數氏に感謝状と記念品を贈呈、製作者保田龍門氏の挨拶、東条首相、翼賛會安藤副總裁、本縣知事の祝辭(代讀)の後學徒三千人が聲高らかに吉田松陰先生の歌を斉唱、萬歳を三唱して同三時盛況裡に閉式した。[寫眞は除幕式の盛況]」

(『読売新聞』静岡版・遠州版 昭和17年10月28日)

#### ⑰「時代の節目、多彩な顔 二つの松陰像：下田街道①」

「(前略)当時は教育勅語五十周年、皇紀二千六百年、そして太平洋戦争へとなだれ込む。松陰は忠君愛国の象徴。時節がら銅が使えずセメントになった。佐々木さんは「小学1年。白浜から来てセメントに混ぜる浜の砂利を運んだ」。勤勞奉仕もあった。セメント像は一九七四年の伊豆沖地震の揺れで上半身が落下した。修復したが、接着の跡は残る。屋外彫刻保存修復研究会運営委員で、下田の研究会に参加した東海短期大学教授坂本雅子さんは「一級の芸術。劣化に任せるのはもったいない」と保存を訴える。後背の山肌は県指定天然記念物で海底の隆起を示す偽層。波のイメージがわく。保田氏が適地としたのもうなずける。(後略)」(『静岡新聞』平成19(2007)年2月5日)

#### ⑱「屋外彫刻調査保存研究会シンポジウム」

開催期日:平成11(1999)年3月6日

会場:下田市柿崎地区公会堂

基調講演:「像保存の意義」千田敬一

講演:「保田龍門について」寺坂淳治

報国:「像の保存状況」黒川弘毅

講演:「材料への環境影響と保存」古明地哲人

パネルディスカッション

講演:「像建設からこれまでの経緯について」渥美俊夫

年表稿出典表記凡例

- 民友 『静岡民友新聞』
- 新報 『静岡新報』
- 静岡 『静岡新聞』
- 東日 『東京日日新聞』
- 毎日 『毎日新聞』
- 読売 『読売新聞』
- 朝日 『朝日新聞』
- 駿遠豆 『駿遠豆』
- 美術年鑑 『日本美術年鑑』
- 出品目録 『昭和期美術展覧会目録』『大正期美術展覧会目録』『近代日本アートカタログコレクション』所収出品目録及び原本等。
- 戦時下 『戦時下日本美術年表』
- 資生堂 『資生堂ギャラリー75年史』
- 市井 『市井展の全貌』
- 目録 中川雄太郎所蔵資料コピー
- 案内 中川雄太郎所蔵資料コピー
- 規則 中川雄太郎所蔵資料コピー
- 計画書 中川雄太郎所蔵資料コピー
- S./ 昭和 年 月 日
- 《 》 作品名 (太字は図版掲載)
- \* 図版掲載紙と他の区別記号
- 他『アトリエ』『工芸』『中央美術』『塔影』『美術新論』『美之国』『みづゑ』等は誌名を表記。
- 『静岡県史』他各市史等は適宜略記した。

参考文献

- 美術研究所編『日本美術年鑑』[復刻:国書刊行会] 平成8(1996)年
- 小林忠編『美術関係雑誌目次総覧』国書刊行会 平成12(2000)年
- 東京文化財研究所編『昭和期美術展覧会目録』中央公論美術出版 平成18(2006)年
- 針生一郎ほか編『戦時と美術 1937-1945』国書刊行会 平成19(2007)年
- 飯野正仁編『戦時下日本美術年表』藝華書院 平成22(2010)年
- 東京美術倶楽部『市井展の全貌』八木書店 平成24(2012)年

昭和16年 1941

- 1/3 第4回烏同人洋画展於東京資生堂(-)。  
中村万平《早春》(資生堂)
- 1/8 龍駿介、富士白糸へ旅行(-10)。(民友 1/14)
- 1/15 大須賀個人スケッチ展於吉見書店(-20)。  
(新報 1/13)
- 1/15 在京県出身美術家会合。(駿遠豆 16-2)
- 1/17 都築真琴第3回個展於東京日本橋高島屋(-22)。  
《長閑》《遊鯉》  
(塔影 17-3\*, 美之国 17-2\*, 美術年鑑 S17)
- 1/ 平口勝雄、西益津に滞在し揮毫。  
(新報 1/20, 21, 22)
- 1/20 長尾一平『山本芳翠』出版祝賀会於東京丸の内  
マール。(駿遠豆 16-3)
- 1/21 和田英作近作画展於東京日本橋三越(-24)。  
(朝日 1/23, 美術年鑑 S17)
- 1/22 静岡県美術協会主催慰問画展覧会於田中屋  
(-26)。(読売静岡 1.2 版 S15.12/1.8, 17, 19, 25, 東  
日静岡 1.2, 3 版 1/22, 23, 26)
- 1/23 第18回白日会展於東京府美術館(-2/5)  
塩澤祥悟《山村》島田四郎《踏切にて》《仁王と  
子供》山道栄助《巖》《史跡》《渚》(民友 2/6\*,  
新報 2/6\*, 出品目録, 美術年鑑 S17)
- 2/5 栗田九品庵新作画展於東京芝東京美術倶楽部  
(-7)。秋野不矩《菜の花》(塔影 17-4\*, 市井)
- 2/11 石川欽一郎水彩画展於大阪青樹社(-15)。  
(美術年鑑 S17)
- 2/11 朝倉文夫《岡野喜太郎像》除幕式。  
(東日静岡 2.3 版 2/6\*, 新報 2/7, 11, 民友 2/11)
- 2/14 第28回光風会於東京府美術館(-3/1)。  
赤城泰舒《新緑》石川欽一郎《大堰川丹波路》  
藤本東一良《貝殻をみる》《エプロンの女》  
(出品目録)
- 2/15 第37回太平洋画会展於東京府美術館(-28)。  
漆畑廣作、大川薄水、佐野喜太郎、鈴木満、和田  
實入選。(新報 2/15)  
大川薄水、佐野喜太郎、鈴木満、和田實入選。  
(民友 2/15)  
鈴木満葵賞受賞。(朝日 2/18)  
杉本宗一《増田先生像》《楯》《鐘旭》鈴木満《画  
室にて》相曾秀之助《七面鳥》漆畑廣作《午後

- の市場》《梅》大川薄水《山の水車》  
(みづゑ no.437, 駿遠豆 16-4\*, 出品目録)
- 3/2 第9回旺玄展於東京府美術館(-16)。  
木梨素隆《風景》井口清《写生》甲賀義成《増産風景》  
入選。(新報 3/2)  
池谷佐一郎《白い壁》(駿遠豆 16-4, 5\*)
- 3/5 第11回独立展於東京府美術館(-25)。  
齊藤準見《藍壺の瀧》入選。(新報 3/6)  
影山静子、開門久、齊藤準見、長尾完二入選。  
(新報 3/5, 民友 3/5)  
影山静子《温室》開門久《熱海梅園》齊藤準見《藍  
壺の瀧》、長尾完二《庭》山道栄助(会友)《老梅》  
《竹林》(出品目録)
- 3/9 第2回三春会展於東京日本橋三越(-9)  
中村岳陵《梢囀》(塔影 17-5\*, 市井)
- 3/13 山本瑞雲逝去。享年 75。(美術年鑑 S17)
- 3/19 第9回東光会展於東京府美術館(-30)。  
吉野不二太郎入選。(民友 3/19, 東日静岡 1, 2, 3  
版 3/17, 読売静岡 A 版 3/19)
- 3/25 大政翼賛会県支部、文化委員会結成委員会開催。  
(民友 3/12, 読売静岡 A・B 版 3/8, 東日静岡 1 版  
3/24, 26)
- 3/26 田中一望日本画展於熱海信用組合(-28)。  
(民友 3/12, 28)
- 3/28 第16回国画会展於東京府美術館(-4/9)。  
日下泰輔入選。(新報 3/30)  
日下泰輔、中川雄太郎、鈴木至朗入選。  
(民友 3/30)  
柏木俊一(同人)《白椿》日下泰輔《松庭》《蓮枯》  
洪川駿二《蘇鉄》《小池静》二重作龍夫《アトリエ  
の壁》《鶯来る頃》山村誠(同人)《朝影》《軍鶏  
図》中川雄太郎《仙南之初夏》山口源《燭下の花》  
鈴木至郎《野菜の図両面使用テーブル掛》《柿の  
図のれん》増田邦太郎《唐辛子模様片側帯地》(出  
品目録)
- 3/28 第1回尚綱会展於東京日本橋東美倶楽部(-30)。  
中村岳陵《日午》(市井)
- / 茨木猪之吉『山の花』刊行。(駿遠豆 16-4)
- 4/ 愛宕下美術館、横須賀町より助成を受ける。  
(民友 7/23)
- 4/2 赤城泰舒富士山展於大阪天賞堂画廊(-6)。



(美術年鑑S17)  
 / 赤城泰舒《富士紅葉》(みづゑno.440)  
 4/8 松島画舫春季新作展於東京日本橋東美倶楽部(-10)。秋野不矩《山吹》中村岳陵《干潟》(美之國,17-5\*,市井)  
 4/12 第19回春陽會展於東京府美術館(-25)。青木達弥《花》《緑衣》《卓上貝殻》《貝ト布》井上重生《門》《魚》栗田雄(会員)《南豆早春》中村万平《浜波太》《岡波太》山崎律津子《アネモネ》《シユミーズの女》(美術年鑑S17\*,出品目録)  
 4/17 第28回日本水彩画會展於東京府美術館(-30)。石川欽一郎《衣笠山郊外》飯田虎雄《山西省介休》みずゑ賞。(新報4/27)  
 4/18 燦墨社展於浜松商品陳列所(-22)。(東日静岡1版4/16)  
 4/21 石川欽一郎水彩展於銀座青樹社(-25)。  
 4/23 第14回構造社展於東京府美術館(-5/4)。堤達男《追想》《少女》(朝日5/4,出品目録)  
 4/26 第13回第一美術協會展於東京府美術館(-5/10)。土屋五夫《少女坐像》《豆秋》入選。(新報5/3)  
 5/6 肇國創業絵巻公開於東京帝室博物館表慶館(-20)。中村岳陵他。  
 5/9 河野栗雲、南洋神社に小室翠雲作品奉納の寸法調べを兼ねてパラオに渡航(-5/29)。(民友5/15,新報6/2,読売静岡B版5/8,31,東日静岡3版5/30)  
 5/ 保田龍門に吉田松陰金子重輔大理石レリーフ依頼。(民友5/15,東日静岡版5/15,駿遠豆16-8)  
 5/14 東京會春季展於東京芝東京美術倶楽部(-16)。秋野不矩《朝》(市井)  
 5/14 第4回大日本美術院展於東京府美術館(-25)。平口勝雄《初夏》(民友5/27,新報5/27)  
 5/16 静岡県美術協會展第7回展(-20)。(目録,新報5/7,民友5/16,20,東日静岡1,2,3版5/16)審査員:牧野虎雄、石川欽一郎、中村岳陵、澤田政廣、芹澤銜介。(駿遠豆16-7,美術年鑑S17)  
 5/16 第1回正統木彫家協會展於東京府美術館(-24)。澤田政廣《高佐士野の乙女》(美術年鑑S17)澤田政廣《阿弥陀如来坐像》《高佐士野の乙女》長澤幸夫《一休》(朝日5/23)

澤田政廣《七姫》《紅衣笛人》  
 5/16 青甲社海軍献納画展於京都市公会堂(-18)他。  
 秋野不矩《天龍川》(塔影17-6)  
 5/22 第1回創元展於東京上野日本美術院(6/1)。榛葉嘉一郎《上野原風景》(創元展目録集)  
 5/23 第2回日本エッチング展覽會於東京資生堂。赤城泰舒、小泉癸巳男出品。(資生堂)  
 5/25 第5回海洋美術展於東京府美術館(-6/5)。石川欽一郎(招待)《紅海より見たる埃及の一角》漆畑廣作《巨船を造る》塩澤祥悟《曇日の東海岸》藤本東一良《進水》二重作龍夫《大漁》川村清雄《黄海海戦》(みづゑno.441\*,出品目録)  
 5/29 熊岡美彦、絵画道場設立のため熱海市長を訪問。(新報5/30)  
 6/1 宗美展於東京資生堂(-5)。曾宮一念出品。(資生堂)  
 6/ 鶴田吾郎富士美術道場の計画延期、江浦に富士美術道場開設。(朝日5/22,6/18,みづゑno.442)  
 6/ 日名子實三、米静子定。(民友6/3,新報10/5)  
 6/6 増田匡彦洋画個人展於吉見書店(-9)(目録)  
 6/11 西山塾青甲社海軍献納画展於日本橋高島屋(-15)。秋野不矩《天竜川二題》(塔影17-7\*,美術年鑑S17)  
 6/12 森山三郎「初夏の古奈」(新報6/12,13,14)  
 6/12 北川民次、東本春水諸国祭礼風俗小品展於名古屋丸善(-14)。(美術年鑑S17)  
 6/13 三越日本画小品展於東京日本橋三越(-18)。中村岳陵《薰風》(國畫1-1\*,市井)  
 7/1 第2回聖戰美術展於日本美術協會(-20)。森山三郎入選。(民友6/29)杉本宗一《突撃》(駿遠豆17-6)漆畑廣作《餌付》杉本宗一《突撃》《烏蘭不浪東門戦名譽戦死江馬肇君》森山三郎《温泉療養所にて(古奈)》二重作龍夫《親日教育》堤達男《雲湧きぬ》(出品目録)  
 7/2 わかもと本舗栄養と育児の会主催全日本学童興亜作品静岡県選奨會作品展覽會於県教育會館(-5)。(新報S15.10/25,26,27,11/8,17,21,S16.1/12,2/12,13,14,15,27,3/2,7/2)

7/12 第1回一采社展於東京銀座資生堂(-14)。野島青茲《花》《浴衣》《夜》(國畫1-2\*,資生堂)  
 7/12 田川泉個人展於浜松谷島屋(-16)。(新報7/11)  
 7/14 石川欽一郎水彩画近作展於大阪美交社(-18)。(美術年鑑S17)  
 7/18 在京県出身美術家會合。(駿遠豆16-9)  
 7/18 栗田九品庵第2次新作画展於東京芝東京美術倶楽部(-19)。中村岳陵《爽涼》(國畫1-2\*,市井)  
 8/ 松浦菅吉、ブロンズ代用セメント材発明。(新報8/13,読売遠州版8/12)  
 8/2 小林金治個人展於清水専念寺(-3)。(民友8/2)  
 8/ 中島東洋《尾崎伊兵衛胸像》計画。(民友8/24)  
 8/23 革静會洋画展於田中屋(-)。 (民友8/24,25)  
 8/27 一杉會第2回展於浜松松菱(-31)。於静岡田中屋(9/3-7)。(新報8/28,民友9/2)  
 8/28 県より各町村へ美術展出品銅使用取扱の通知。(民友8/29)  
 8/30 七凡社展於田中屋(-9/2)。(目録,新報8/30)  
 8/31 井上平蔵近況。(民友8/31)  
 9/1 第28回院展於東京府美術館(-20)。藤井白映《南天》中村直人《草薙劍》(美術年鑑S17\*,出品目録)  
 9/1 第28回二科展於東京府美術館(-21)。北川民次《学修》《勤勞》《舞妓》(朝日9/14)遠藤君雄入選。(民友8/31,新報8/31,読売静岡AB版8/31)梅原英子《花》遠藤君雄《山麓の村》北川民次(会員)《学修》《勤勞》《舞妓》永井武夫《独楽と子供》水野欣三郎(会員)《国盛氏頭像》(美術年鑑S17\*,出品目録)  
 9/ 小栗正、浜松機械補導所入所。(民友11/14)  
 9/9 大森桃太郎富士山展於東京銀座青樹社画房。(駿遠豆16-10)  
 9/13 第1回航空美術展於東京日本橋高島屋(-21)。漆畑廣作《細密検査》(駿遠豆16-11)澤田政廣《浮田幸吉像》(朝日9/9\*,15)青木達弥《海鷲の像》漆畑廣作《細密検査》島田四郎《模型非行大会入場式の図》澤田政廣《浮田幸吉》二重作龍夫《戦雲》富山光明《艦載機の出發》水野欣三郎《或る航空記念碑の草稿一部(グライダー)》山道栄助《滑空士》《曲浦滑空》吉野不

二郎《童心練成》和田金剛《碧空》(出品目録)  
 9/16 小泉癸巳男昭和大東京百景画展於上野松坂屋(-21)。(美術年鑑S17)  
 9/23 第5回一水會展於東京府美術館(-10/4)。滝澤清《夏空の下》渡邊さち《S嬢像》勝間田武夫《庭先》入選。(出品目録,新報9/23)  
 9/23 岳陽記念現代大家新作展覽會於東京日本橋三越(-26)。(駿遠豆16-9,11)  
 9/ 細井繁誠《下田港》中村良作《海頭青春》制作中。(新報9/27)  
 9/26 日本画名幅展並明治洋画回顧展於大札記念京都美術館(-10/12)。川村清雄《嵯峨野》《猫》《破船》《肖像》《風景》《松竹梅》出品。(美術年鑑S17)澤田政廣《尾崎元次郎像》制作。(駿遠豆16-10,民友6/19)  
 10/ 金属回収始まる。(民友8/31,10/4,5,新報9/21,24,10/15,23,28,東日静岡1,2,3版11/1,3版12/11)  
 10/5 讀畫會傷痍軍人慰安献画會展於松阪屋(-10)。(民友10/5)  
 10/ 齊藤文人《進撃》靖国神社に奉納。(民友10/7)  
 10/7 県振興課、二宮尊徳像の供出依頼。(東日静岡1,2版10/8)  
 10/7 曾宮一念作品鑑賞展於神戸画廊(-10)。(美術年鑑S17)  
 10/14 大札記念京都美術館秋季特別陳列(-11/12)。曾宮一念《海》出品。(美術年鑑S17)  
 10/16 第4回新文展於東京府美術館(-11/20)。花村晃敏《遊鹿》青木達弥《薄》\*\*赤城泰舒(無鑑査)《新羅仏(毘盧舍那仏)》石川欽一郎(無鑑査)《奥信濃路》勝間田武夫《男の肖像》鈴木満《妹の肖像》中村万平《着物の女》藤本東一良《父とゴムの木》細井繁誠(無鑑査)《下田港》山口源《向日葵と玉蜀黍》相曾秀之助《女性》太田重範(無鑑査)《青葉の笛》澤田晴廣(審査員)《神通》杉本宗一(無鑑査)《増田先生》\*\*\*鈴木国策《阿良志乎》長沢幸夫(無鑑査)《爽かな生》和田金剛(特選)《海紅》\*\*\*二橋美衡《彫金花蝶文花器》\* (美術年鑑S17\*,新美術no.4\*\*,駿遠豆16-12\*\*\*,17-9\*\*\*\*,出品目録)

10/30 山道栄助個人展於吉見書店(-11/3)。(民友11/1, 新報10/30)

10/30 中村良作《海頭青春》、傷痍軍人療養所に寄贈される。(新報9/27, 読売静岡B版11/1)

10/31 県下教職員作品展覧会第13回展於県教育会館(-11/3)。(新報10/31, 民友11/1, 2)

11/1 第4回霜林会展於東京銀座資生堂(-4)。曾宮一念《麦秋》《夕雲》《ひるがほ》《ひまはり》(美術年鑑S17, 資生堂)

11/1 金属特別回収。(新報10/28, 29, 民友10/31)

11/4 三宅克己、石川欽一郎近作水彩画展於東京銀座青樹社(-7)。(美術年鑑S17)

11/5 第1回源展展於東京日本橋高島屋(-9)。曾宮一念《麦秋》《梨》(新美術no.5, 美術年鑑S17)

11/8 中村久平洋画個展於浜松谷島屋(-13)。(民友11/4, 11, 読売遠州版11/7, 11)

11/11 浜松五社神社宝物展於松菱(-17)。山本英葵、菊池甲冠、中村白崖撰写。(読売静岡版11/8, 東日静岡1版11/8, 民友10/23)

11/12 東京会秋季展於東京芝東京美術倶楽部(-14)。秋野不矩《子猫》(市井)

11/13 赤城泰舒水彩画個展於京城三越(16)。(美術年鑑S17)

11/14 童土社創作版画展覧会第12回展於吉見書店(-17)。(目録)

11/25 第10回日本版画協会展於東京府美術館(-12/2)。小泉癸巳男《根津権現の驟雨》(駿遠豆17-10) 小川龍彦《桑畑の富士》《富士見ゆ》小泉癸巳男(会員)《待乳山遠望の雪》《試作》《寿像》《吹雪の桜田門》《根津権現の驟雨》松永茂〔栗山茂〕(会員)《北陵附近1》《北陵附近2》山口源《静物》《実》中川雄太郎《K(荘の庭)》(出品目録)

11/25 三宅克己・石川欽一郎近作水彩画展大阪青樹社(-29)。(美術年鑑S17)

11/27 大川武司油絵展於東京銀座菊屋画廊(-30)。(朝日11/21)

11/ 《鈴木與平像》落成式。(東日静岡2版11/2)

12/1 第2回新生活美術展示会於東京資生堂画廊(-9)。北川民次出品。(資生堂)

12/2 三越新作日本画展於東京日本橋三越(-6)。

近藤浩一路《連峯雲》中村岳陵《竹》(國畫2-2\*, 市井)

12/9 松坂屋復興開店。(静岡12/6)

12/18 吉野不二太郎展於吉見書店(-24)。(静岡12/19)

12/19 名士書画彫塑即売会於東京松屋(-21) 澤田政廣、赤城泰舒、青木達弥他出品。(朝日12/19)

12/ 日本画家秀作展於東京朝日ビル(-21)。(朝日12/21)

12/20 齊藤文人《題名不詳》山本提督へ寄贈の作品完成。(東日静岡2, 3版12/21)

昭和17年 1942

1/10 彦坂繁三郎、逝去。(駿遠豆17-2, 読売静岡B版1/17, 25, 静岡1/13)

1/ 高山崇文、鉄舟寺伊藤台巖の依頼により正受庵後援者への百幅制作。(東日静岡2, 3版1/22)

1/10 山岳写真展於吉見書店(-14)。(静岡1/9)

1/ 金属特別回収。《二宮尊徳像》各学校から回収。(東日静岡1, 2版S16.10/8, 1版S16.10/29, 1, 2, 3版S17.1/17, 2/13, 静岡S16.12/19, S17.1/16, 29, 2/1, 2)

1/14 県、二宮尊徳像その他金属像回収につき通達。(県史, 静岡S16.11/19)

1/14 東西巨匠日本画展於教育会館。(静岡1/14)

1/21 松影会第3回展於田中屋(-26)。(静岡1/24)

1/22 中村直人《日本武尊像〔草薙劍〕》静岡に到着。(新報S16.10/30, 静岡1/23, 読売静岡AB版1/23, 東日静岡1, 2, 3版1/10, 23\*, 駿遠豆17-3, 4)

1/24 第19回白日会展於東京府美術館(-2/6)。望月清作《梅咲く頃》(静岡2/13) 塩澤祥悟《庭園》《棕櫚》島田四郎《農村風景》《夏》山道栄助《梅林》《朝顔》(出品目録)

1/25 彦坂繁三郎菰山中学学校葬。遺作展及び門下生作品展。(読売静岡B版1/17, 25, 静岡1/13)

1/ 《瀧口かね像》献納願提出。(東日静岡3版1/27)

1/ 山下青崖歿。享年85歳。(浜松市史)

2/ 関野聖雲《興静観世音菩薩》22体、静岡市大火被災寺院に贈られる。(静岡1/11, 30, 東日静岡2, 3版1/30, 駿遠豆17-3・4)

2/14 第29回光風会出品於東京府美術館(-3/11) 赤城泰舒(会員)《黄壁》\*石川欽一郎(会員)《早

春の山里》藤本東一良(会友)《画室の女》藤本東一良光風特賞。(駿遠豆17-7\*, 出品目録)

2/14 第38回太平洋画会展於東京府美術館(-3/1)。杉本宗一《横綱》《突撃》《文人》《部隊長》相曾秀之助《鰐》《長鳴鳥》(出品目録)

2/28 河井寛次郎、濱田庄司、芹澤銈介、棟方志功近作展於東京駒場日本民芸館(-3/1)。(美術年鑑S18)

/ 河瀬道雄《黒衣少女》(駿遠豆18-2)

3/3 第10回旺玄社展於東京府美術館(-16)。渡辺章二《工場の附近》(静岡3/5, 駿遠豆17-3・4\*)

3/5 第12回独立展於東京府美術館(-23)。齊藤準児、八木昌一入選。(静岡3/5, 5/23, 読売静岡AB版3/6) 遠藤君雄《村落(2)》入選。(読売静岡B版3/7) 遠藤君雄《村落(2)》影山静子《憩い》齊藤準児《石垣苺B》長尾完二《養源寺の秋》間間久《早春》八木昌一《草畑》山道栄助(会友)《四天王》《梅》《冬外》(出品目録)

3/11 石川欽一郎三宅克己水彩画展於岡山金剛荘(-14)。(美術年鑑S18)

3/ 岡村ひで子、横濱紅葉会アトリエより肖像画3級の免状を受ける。(静岡3/16)

3/19 軍用機献納作品展於東京日本橋三越(-22)。中村岳陵《清香》近藤浩一路《碧痕》秋野不矩《桃に小禽》(國畫2-5\*, 市井)

3/20 第10回東光会展於東京府美術館(-30)。吉野不二太郎《古梅山門》(静岡3/21)

3/21 岡野栄逝去。享年63。(朝日3/24)

3/21 鈴木基弘《手つなぎ地藏尊》除幕式。(静岡3/20, 読売静岡AB版3/6\*)

3/ 《神武天皇像》古物商より買い取られ熱海国民小学校に奉納される。(読売静岡AB版1/23, 3/22\*)

3/26 第17回国画会展於東京府美術館(-4/5)。大川武司(同人)《叢》日下泰輔《池畔冬色》《晚秋庭》洪川駿二《樹下観音》《春堤》二重作龍夫《静物》《早春》山村誠《山波》《山湖飛禽》中川雄太郎《米穀増産協議会》山口源《石垣苺》《鏡の有る静

物》増田邦太郎《おんほこ模様名古屋帯地》(出品目録)

/ 浜松文化協会設立。(静岡2/25, 3/18)

4/1 松坂屋全館復興開館。(静岡4/1)

4/ 北川民次「マハフノツボ」刊行。

4/2 赤城泰舒富士山展於銀座天賞堂(-6)。(美術年鑑S18)

4/5 霜林会洋画展於東京銀座資生堂(-8)。曾宮一念出品。(資生堂)

4/ 《日比谷左衛門像》供出される。(毎日静岡版4/9, 読売静岡A版4/8\*, 東日静岡2, 3版4/8\*)

4/8 第3回三春会展於東京日本橋三越(-12)。中村岳陵《山桜》(市井)

4/9 第20回春陽会展於東京府美術館(-21)。青木達弥《卓上貝殻》《エリカ》《アネモネ》井上重生《樹間》小栗哲郎(会友)《洪川》《洪川早春》栗田雄《秋意》中村万平《少女》(出品目録)

4/19 大森桃太郎第3回富岳展於東京銀座青樹社。(駿遠豆17-6)

4/20 松島画舫新作鑑賞会於東京日本橋東美倶楽部(-22)。中村岳陵《鮎》(市井)

4/23 小倉右一郎《山田長政像》貿易会館内に設置。(読売静岡AB版4/24\*, 駿遠豆17-6, 静岡4/24)

4/26 赫土社展於清水市商工会議所を予定。(静岡2/13)

5/1 浜松名物展覧会於松菱(-10)。(東日静岡1, 3版4/30)

5/9 第29回日本水彩画会展於東京府美術館(-21)。清水柳太《白糸瀧》(駿遠豆17-5\*) 石川欽一郎《山郷の春》

5/13 石川欽一郎新作水彩画展於数寄屋橋日動画廊(-15)。(美術年鑑S18)

5/14 東京会春季展於東京芝東京美術会館(-16)。秋野不矩《牡丹》(市井)

5/20 現代名家紙本新作画展於東京日本橋高島屋(-24)。近藤浩一路《日田夏嵐》(市井)

5/21 静岡県美術協会展第8回展於静岡市商工奨励館・教育会館(-25) 審査員:斎藤与里他。(静岡5/23, 24, 駿遠豆17-8, 東日静岡1版5/13, 目録)



- 5/23 第2回正統木彫家協会展於東京府美術館(-24)。澤田政廣《阿弥陀如来》《繚乱》和田金剛、長澤幸夫、鈴木国策他。(駿遠豆17-8)
- 5/24 第6回海洋美術展於東京府美術館(-6/7)。塩澤祥吾《漁港焼津》《南へ渡る船》入選。(東日静岡2版6/4) 赤城泰舒《招待》《叢石亭(朝鮮)》漆畑廣作《発表特別攻撃隊》塩澤祥吾《漁港焼津》《南へ渡る船》三好光志《夕照》(出品目録)
- 5/25 浜松翼賛文化協会第1回各部会於浜松市公会堂。(東日静岡1版5/13)
- 5/26 赤城泰舒水彩画近作展於銀座資生堂(-29)。(美術年鑑S18) 《池畔錦織》(みづゑno.453)
- 6/ 東叡会戦勝祈願奉納。石川欽一郎《富士》(朝日5/30)
- 6/1 清水柳太《富士三態》富士宮市へ寄贈。(東日静岡2版6/3)
- 6/ 白井謙次郎《相馬忠雄像》完成。(東日静岡2版6/3\*, 読売静岡い版6/3)
- 6/ 大政翼賛会県支部、市町村に翼賛文化連盟の結成を企画。(静岡6/3,9,9/15,読売静岡い版6/3)
- 6/7 第11回日本版画協会展於東京府美術館(-14)。小川龍彦(会員)《船上富士》山口源《山に開く窓》《棕櫚の花》(出品目録)
- 6/16 三越日本画小品展於東京日本橋三越(-19)。中村岳陵《青詔》(日本美術1-4\*,市井)
- 6/17 第15回構造社展於東京府美術館(-27)。堤達男《レリーフ習作》《雄鹿》《相模の海(乙橋媛)》《相模の海》平野敬吉[富山]《裸婦》《裸婦》(出品目録)
- 6/22 柏田文夫、山下青城、柳田華紅らの遠州画人協会、陸海軍に奉納画。(東日静岡1版6/23)
- 6/ 田中政雄《白衣天使の出征》日赤静岡病院に献納。(静岡6/15,東日静岡版6/14\*)
- 6/ 遠州画人協会第1回献画展於松菱。(東日静岡1版7/14,静岡7/3)
- 7/ 渡辺章二《霊峰富士》富士宮市に寄贈。(東日静岡2版7/4)
- 7/1 第2回一采社展於東京銀座資生堂(-4)。野島青茲《人形》《緑苔》他出品。
- (画論no.12,国画2-10\*,朝日7/4)
- 7/12 遠州画人協会総会。10月に展覧会を予定。(東日静岡1版9/14)
- 7/13 橋本多聞洞新作展於東京銀座資生堂(-15)。中村岳陵《清潭》(市井)
- 7/14 《高島勝嘉胸像》設置。(静岡7/15)
- 7/30 浮月、宴会場開業。(静岡8/1,東日静岡1版S16.2/25)
- 8/6 十日会第1回展覧会三島市丸屋呉服店。(東日静岡3版8/6)
- 8/10 小室翠雲、南洋神社献納画《冬の富士》を熱海市伊豆山で制作、完成させる。(静岡8/11,東日静岡2,3版8/11,読売静岡い版8/11)
- 8/15 一杉会第3回展於松坂屋(-21)。東京美術学校卒業生並びに在校生による。土屋欣一《風景》他。(東日静岡2,3版8/18)
- 8/ 内田六郎、ガラス絵文献上梓。(静岡8/17)
- 8/ 革静洋画第3回展於松坂屋(-30)。(静岡8/27)
- 9/1 第29回院展於東京府美術館(-20)。中村岳陵(同人)《緑影》(出品目録)
- 9/1 第29回二科展於東京府美術館(-20)。梅原英子《夏の山》北川民次(評議員)《浜へ行く道》永井武夫《漁村》(出品目録)
- 9/5 第2回創元会展於東京上野日本美術協会(-16)。榛葉嘉一郎《石切場》(創元展目録集)
- 9/12 第2回航空美術展於東京日本橋高島屋(-20) 審査員:澤田政廣他。(朝日9/12) 澤田政廣《習作》(朝日9/15) 島田四郎、大日本航空美術協会賞受賞。(朝日9/15) 北川民次《巣立つ頃》澤田政廣《習作》《航空記念碑》島田四郎《敵を知る》富山光明《爆撃機》三好光志《防空演習見学》(出品目録)
- 9/ 《芹澤良平兵曹長石像》完成。(東日静岡2,3版9/20)
- 9/20 故野間清治別邸から5立像供出。(静岡9/20)
- 9/21 《山田長政献納軍艦図》教師用掛図の為の模写。同図は国民学校4年修身教科書掲載。(東日静岡1,2,3版9/24)
- 9/23 山田長政顕彰展於松菱。(読売遠州版9/24,東日静岡1版9/24)
- 9/23 第6回一水会展於東京府美術館(-10/4)。勝間田武夫《室内》滝澤清《奥入瀬の渓谷》(出品目録)
- 9/26 北遠美術第2回展覧会於二俣町幼稚園(-27)。(東日静岡1版9/29)
- 10/16 第5回新文展於東京府美術館(-11/20)。緒方掃庵、初入選。(静岡10/12東日静岡2,3版10/11,13) 渋川俊二《城》(駿遠豆17-12) 島田四郎、相良文夫、平野富山入選。(静岡10/12,東日静岡2,3版10/11) 平野敬吉[富山]《女》新入選。(東日静岡1,2,3版10/11) 張間禧一、特選。(東日静岡2,3版10/17) 八木秀之助、入選。(静岡10/13,東日静岡2,3版10/13) 秋野不矩(無鑑査)《新秋》青木達弥《秋草》漆畑廣作《ひと刻》大川武司《土》緒方掃庵《古園秋霜》柏木俊一(無鑑査)《白梅》川合改次郎(無鑑査)《山村稲熟す》相良文夫《釣針工場》渋川俊二《城》島田四郎《丘の人達》鈴木満《青年士官》山口源《くずとかまぢゃ》《登攀》相曾秀之助《闘う軍鶏》井戸義夫(無鑑査)《興亜観自在》堤達男《白明》和田金剛《天笑女》稲木春千里(無鑑査)《鉄刀木机》鈴木福富《豊産の囀染屏風》二橋美衡(無鑑査)《白鷺之置物》張間禧一《鷺漆器衝立》八木秀之助《詩絵三宝相手宮》(駿遠豆17-12,出品目録)
- 10/ 水村某《大海戦の実景》相良国民学校に寄贈。(静岡10/3)
- 10/27 保田龍門《吉田松陰像》除幕式。(静岡10/20,27新報S15.7/30,9/16,11/17,東日静岡1,2版S15.2/14,3版S17.6/7,9/14,読売静岡版・遠州版6/7,10/25,28,駿遠豆17-12)
- 10/27 《戦争兵士の群像[ブキテス]》模型完成。水野欣三郎、和田金剛参加。(朝日10/28)
- 10/27 南画展於松坂屋。(静岡10/27)
- 10/30 県教員作品展第14回展於教育会館(-11/3)。審査員:中川一政他。(静岡10/22,11/1)
- 10/31 前田青郁、熱海の清浦奎吾に半身像を送る。(静岡11/1)
- 11/ 熱海滞在の小室翠雲、清浦家弔問。(読売静岡版・遠州版11/6)
- 11/7 童土社版画展第13回展於吉見書店(-10)
- 11/ 小林金治、清水中学校戦死者遺影制作。(東日静岡2,3版11/10)
- 11/ 小倉右一郎《山田長政像》写真を静岡市内国民学校に配布。(静岡11/6,読売静岡版11/8)
- 11/15 竹岡五男作品展於下田伊豆銀行支店(-16)。(静岡11/12)
- 11/16 東京会秋季展於東京芝東京美術会館(-18)。中村岳陵《美男葛》秋野不矩《鶏頭》(市井)
- 11/22 三越新作日本画展於東京日本橋三越(-27)。近藤浩一路《田家新春》(市井)
- 11/24 《相馬忠雄胸像》除幕式於島田商業学校。(静岡10/26)
- 11/26 鈴木朝司《浜松城史》浜松市図書館に寄贈。(静岡11/27)
- 12/3 第1回大東亜戦争美術展於東京府美術館(-27)。審査員:中村岳陵、澤田政廣他。藤本東一良《潜水艦の空母雷撃》(朝日12/6) 藤本東一良《海軍派遣画家》《潜水艦の空母雷撃》吉野不二太郎《再生尽忠》漆畑廣作《修繕工場》(出品目録)
- 12/ 佐藤泰山遺作顕彰の計画。(静岡12/6)
- 12/ 梵鐘の供出相次ぐ。(静岡8/29,11/14,21,22,23,24,25,26,27,29,12/1,9,12,13,14,15,20)
- 12/7 献画奉告祭於護国神社(-8)。(静岡12/6,8)
- 12/7 大東亜戦争献画パノラマ於護国神社(-S17.1/10)。(静岡12/4,6,7,8,13,S17.1/10)
- 12/8 明野陸軍飛行学校軍神堂開堂。澤田政廣、水野欣三郎他が制作に参加。(朝日10/21,12/1)
- 12/ 田中屋、松坂屋、松菱、店舗面積の約2割を産業団体に供出。(静岡12/11)
- 12/ 銅像の自発的供出の要望が出される。(静岡12/13)
- 12/ 《東郷平八郎像》見付国民学校より供出。(読売遠州版12/18)
- 12/19 静岡写真派創立第1回展於松坂屋(-23)。(東日静岡1版12/16,静岡S26.10/24)
- 12/ 清見寺梵鐘、回収除外申請許可される。(東日静岡2版12/20)
- 12/20 第2回尚綱会展於東京芝東京美術会館(-23)。中村岳陵《霜朝》(市井)

12/25 七凡社第4回展於松坂屋(-年末)。知事、鈴木至郎  
作品買上。(静岡12/28)

昭和18年 1943

1/ 栗原誠、百号の油絵献納。(読売静岡版1/16)  
1/ 柴山《興亜地蔵尊》《観音隊像》熱海保善院に寄  
進。(静岡S17.11/25, S18.1/16)  
1/ 小野田高節《十六烈士像》制作。  
(毎日静岡1, 2, 3版1/10)  
1/23 献納染絵展覧会於田中屋(-29)。(毎日静岡1, 2版  
1/21, 3/11)  
1/26 第20回白日会展於東京府美術館(-2/7)。  
塩澤祥悟《岩と波》《冬日残光》島田四郎《ひなた》  
《待つ人々》物故会員特別陳列に栗原忠二《風景》  
一木隴二郎《風景》(出品目録)  
2/3 水彩画推奨記録展於東京銀座青樹社(-7)。  
(美術年鑑S19・20・21)  
2/ 《東郷平八郎銅像》(見付小学校)供出。  
(静岡2/8)  
2/ 《大楠公像》他銅像の供出。(静岡2/8, 22, 26)  
2/10 明治美術名作大展示会於東京府美術館(-28)。  
川村清雄《画室》石川欽一郎《新高山》  
2/10 北遠美術展第3回展於二俣国民学校(-11)。柳田  
華紅他。(毎日静岡版2/3)  
2/14 第30回光風会展於東京府美術館(-27)。  
赤城泰舒(会員)《承德喇嘛廟》《読書》《緑色の流  
れ》石川欽一郎(会員)《古城》《台北郊外》《琵琶  
湖湖畔大津》。藤本東一良(会友)《砂丘》《早春》  
岡野栄(会員)《寒湖》《湖畔の冬》(出品目録)  
2/19 《深澤七郎平銅像》供出。(静岡2/20)  
2/24 日本歴史画展於銀座朝日ビル(-27)。  
中村岳陵《相模太郎》出品。(国画3-4\*, 日本美術年  
鑑S19・20・21)  
2/26 丸子の松並木の伐採式。第一次供木運動による。  
(静岡2/26)。  
2/27 大東亜戦写真展於浜松市公会堂(-28)。  
(静岡2/24)  
3/2 第13回独立展於東京府美術館(-21)。  
齊藤準児《製炭勤労》入選。(読売静岡版3/14)  
遠藤君雄《海辺の村》齊藤準児《製炭勤労》山道  
栄助(会友)《燕子花》《溪流》聞間久《梅》八木昌

一《柿の木》(出品目録)  
3/2 澤田政廣《濱田文作胸像》供出。(静岡3/3)  
3/5 陸軍美術展於東京日本橋三越(-14)。  
鈴木満《出発の朝》(出品目録)  
3/ 金属回収の供出除外の梵鐘9ヶ寺。(静岡3/6)  
3/ 渡辺長男《大谷嘉兵衛像》供出される。(静岡2/6,  
3/3, 読売静岡版3/6)  
3/ 《橋本馬吉像》供出される。(静岡3/9, 10, 毎日静岡  
2版3/12\*)  
3/ 澤田政廣《河西哲英像》供出される。(静岡3/9)  
3/3 第39回太平洋画会展於東京府美術館(-14)。  
杉本宗一(会員)《裸女》《馬》鈴木満《暮ゆく富士》  
《習作》(出品目録)  
3/15 永井武夫遺作展於東京丸の内帝劇画廊(-28)。  
3/24 第11回東光会展於東京府美術館(-4/4)。  
高島茂雄《富士山見ゆる景色》(静岡3/25)  
3/24 現代名家新作色紙絵画展於東京日本橋高島屋  
(-30)。秋野不矩《桃花紅白》近藤浩一路《春日  
運々》中村岳陵《つくし》(市井)  
3/ 《細田多太郎胸像》供出される。(毎日静岡1版3/25)  
3/ 《パレンバン攻撃落下傘部隊記念碑》原型完成。水  
野欣三郎参加。(朝日4/1)  
4/ 静岡市商工奨励館、商工指導所に再編成。展示を  
縮小。(東日静岡版1/16)  
4/6 第21回春陽会展於東京府美術館(-18)。  
山崎利津子入選。(静岡4/7)  
青木達弥《窠跡》《花と貝殻》小栗哲郎(会友)《山  
裾》《養魚場》栗田雄(会員)《海岸》《古い屋敷》山  
崎利津子《花》(出品目録)  
4/7 静岡県工芸美術展於松坂屋(-11)。(静岡4/9)  
4/9 藤原孚石《興亜観音絵葉書》原画完成。  
(静岡4/10)  
4/14 第30回日本水彩画会展於東京府美術館(-25)。  
石川欽一郎《武蔵野の原》赤城泰舒《哈爾濱風  
景》(美術年鑑S19・20・21)  
4/16 県金属回収課設置。(毎日静岡1, 2版4/17)  
4/18 齊藤文人《雲上電撃の図》《米空母を屠る図》靖国  
神社の奉納願い。(静岡6/12, 読売静岡版2/3, 3/4,  
4/21, 毎日静岡1, 2版4/17)  
4/21 アイヌの工芸展於田中屋(-)。(毎日静岡2版4/27)  
4/22 第18回国画会展於東京府美術館(-5/2)。

東克己《デッサン》大川武司(同人)《かぼちゃ》  
《焰》柏木俊一(同人)《農村の一部》日下泰輔《梅  
園》《利庭》《憩》洪川駿二《静池》《梅堤》二重作  
龍夫《春信》《春色》山村誠(同人)《柿(春宵)》《柿  
(黄昏)》中川雄太郎《山の仕事場》山口源《網棚》  
《庭の静物》(出品目録)  
4/22 正統木彫家協会展於東京府美術館(-30)。  
澤田政廣《南方女人柱像》(美術年鑑S19・20・21)  
和田金剛《南方への構想》(戦時下)  
4/29 静岡県翼賛書道連盟創立總會於教育会館。  
(静岡4/24)  
5/1 細井繁誠、陸軍嘱託として中国に赴く(-8/25)。  
(静岡4/27, 6/30, 8/17, 18, 19, 20, 24, 28, 毎日静岡  
2版3/16, 8/28)  
5/3 第16回構造社展於東京府美術館(-15)。  
平野敬吉[富山]《防空》《立女》(出品目録)  
5/ 成瀬六吉《乃木希典石像》《東郷平八郎石像》完  
成、7/17浜松弁天島に建立。  
(毎日静岡1版5/7\*, 静岡7/3)  
5/8 田辺力弘《虚空蔵菩薩像》入仏式於鶴田寺。  
(静岡5/6)  
5/11 田辺力弘《榮西禪師像》村松氏宅より臨濟寺に仮  
安置。(静岡5/6\*, 12, S17.8/23)  
5/14 東京会春季展於東京牛込末よし亭(-16)。  
秋野不矩《山吹》(市井)  
5/17 第3回一采社展於東京銀座資生堂(-19)。野島青茲  
《石垣》《鯉》《毛糸》(国画3-6, 9)  
5/18 美術報国会結成・日本美術工芸統制会設立。  
(朝日4/14, 25, 5/5, 18)  
5/18 第7回海洋美術展於東京府美術館(-6/2頃)  
塩澤祥悟《南へ行く船》(東日静岡版6/4)  
石川欽一郎《招待》《昭南島の一景》島田四郎《織  
手ひたすらなり》藤本東一良(無鑑査)《朝の海》  
《グアム島夕照》《岬の有焼》《沖のスクール》《午後  
の海》吉野不二太郎《潜望行》  
(出品目録)  
5/19 三澤佐助「学徒と増産作業」(静岡5/19)  
5/21 現代大家新作日本画展於東京日本橋三越(-25)。  
中村岳陵《翠竹》(市井)  
5/22 赫土社絵画展覧会於清水市商工会議所(-25)。  
(目録)

5/25 曾宮一念鑑賞展於丸の内帝劇画廊(-31)。  
(美術年鑑S19・20・21)  
/ 曾宮一念《南白亀川》(新美術no.27[みづゑno.468])  
6/ 野島青茲、県立気賀女学校嘱託講師となる。  
6/ 吉田三郎《清水次郎長像》朝倉文夫《高山樗牛像》  
供出される。(静岡3/13, 読売静岡版6/9\*)  
6/9 三越日本画小品展於東京日本橋三越(-15)。  
中村岳陵《雨後》(国画3-9\*, 市井)  
6/11 銅像応召のための折衝始まる。《山本勝二像》《高  
山仰止像》《松島十湖像》《岩田立山像》《大賀辰  
太郎像》《宮本甚七像》《山葉楠寅像》《小澤義助  
像》他。(静岡6/10)  
6/12 前田靄斎個人展於静岡市公会堂(-13)。  
(静岡6/13)  
6/ 《長澤重兵衛像》供出。(静岡6/12)  
6/13 松田一堂遷化。享年74。(静岡6/14)  
6/ 長谷川栄作《井上啓作銅像》除幕前に供出。  
(静岡6/14)  
6/16 赤城泰舒水彩画展於銀座資生堂(-19)。  
(美術年鑑S19.20.21, 資生堂)  
6/ 沼田一雅他《征清記念銅標》供出される。  
(読売遠州版6/20)  
6/20 第12回日本版画協会展於東京府美術館(-29)。  
小泉癸巳男(会員)《大秦野の不二》《農家と不二》  
《北口頂上》中川雄太郎(会員)《花》《湖畔》松永  
茂[栗山茂](会員)《越香春花之図》山口源《芍  
薬》《水疹》(出品目録)  
6/21 東都名家新作日本画展於東京銀座資生堂(-23)。  
中村岳陵《薊》(市井)  
6/21 浜松市第1次金属非常回収。銅像も第2次回収を  
待たず供出へ。  
(読売遠州版S16.10/29, S18.6/10)  
6/21 朝倉文夫《岡野喜太郎像》壮行式。(静岡6/20\*,  
毎日静岡2版6/20)  
6/ 新田藤太郎《松浦五兵衛像》応召壮行式。  
(静岡2/3, 4/6, 13, 毎日静岡1版2/2, 6/26\*,  
東日静岡1版S17.4/14)  
6/24 静岡県美術協会第9回展於松坂屋(-29)。  
(静岡6/24, 25, 要項, 決算報告)  
7/8 航空美術協会会員土浦航空隊見学。澤田政廣、  
水野欣三郎他。(朝日7/9)



- 7/14 小栗哲郎「地方文化に就て」(静岡7/14)
- 7/26 石川欽一郎個展於銀座日動画廊(-29)。(美術年鑑S19.20.21)
- 7/ 斎藤文人、作品献納。(静岡7/27)
- 7/ 阿井□□《文殊菩薩像》森町大洞院に安置。(静岡7/29)
- 7/28 陸軍美術協会会員50余名、富士裾野で砲撃演習見学。(戦時下)
- 8/2 中村万平戦病死、26歳。
- 8/5 中一彌来静、静岡新聞連載「新しき富士」挿絵の為(-6)。(静岡7/9)
- 8/8 静岡県絵画報国会発会式於葵文庫。(静岡8/7、案内、規則)
- 8/ 高木千蒼《山本元帥肖像》制作、他出征軍人肖像を描く。(静岡8/24)
- 9/1 第30回二科展於東京都美術館(-20)。梅原英子《真夏の花》北川民次(評議員)《農漁之図》《鉱士之図》(出品目録)
- 9/1 第30回院展於東京都美術館(-20)。中村良作、入選。(毎日静岡版9/2)野島青茲《水辺》(読売遠州版9/1)中村岳陵《まひる》中村良作《鹿島祭》野島青茲《水辺》(出品目録)
- 9/1 国民総力決戦美術展於東京都美術館(-16)。鈴木満《坑底に闘う》中村岳陵《題不明》(みづゑno.480、出品目録)
- 9/3 戦力増強決戦漫画展於松坂屋(-5)。(読売静岡版9/3、毎日静岡版9/1、読売遠州版9/2)
- 9/8 国立産業安全参考館開館。水野欣三郎《石炭戦士像》(朝日8/28)
- 9/ 大森桃太郎近作発表会於東京青樹社(-19)。(朝日9/16)
- 9/ 武石弘三郎《高山仰止像》供出される。中島東洋《宮本甚七像》他、《長本巖八像》《岩田立山像》《岡本巖像》《新野与平像》《山下徳太郎像》供出される。(静岡6/10、S1612/24、読売遠州版9/4、東日静岡3版S16.12/10)
- 9/17 第3回航空美術展於東京日本橋高島屋(-26)。三好光志(招待)《荒鷲明王》北川民次(会員)《制圧》島田四郎《莖の花》澤田政廣(審査員)《雛鷺》水野欣三郎(客員)《羽搏》和田金剛(招待)

- 《防空》《国土の守り》(出品目録)
- 9/23 第7回一水会展於東京府美術館(-10/4)。勝間田武夫《溪流》《世古の湯付近》滝澤清《信濃路》(出品目録)
- 9/ 県翼賛会、文化委員会設立。(静岡8/31)
- 10/2 山道栄助個展於東京銀座美穂堂(-6)。(美術年鑑S19.20.21、朝日10/2)
- 10/16 第6回新文展於東京都美術館(-11/20)。秋野不矩(招待)《童女》(美術年鑑S19.20.21)日下泰輔《新羅仏》(静岡S19.2/5)浅井行雄新入選。(朝日10/10)山崎利津子新入選。(朝日10/13)関曄明《秋映》野島青茲《工房》青木達弥《窠跡》赤城泰舒《山村渡頭》石川欽一郎(招待)《梓川平野》漆畑廣作(特選)《冬支度》緒方掃庵《伊豆多賀風景》北川民次(招待)《秋の農園》日下泰輔《新羅仏》渋川俊二《ひまわり》島田四郎《老舗店頭》鈴木満(特選)《武士古老》藤本東一良《船匠》細井繁誠(無鑑査)《競馬》山崎利津子《花》浅井行雄《勝利》太田重範(無鑑査)《鞍馬の牛若》澤田政廣(元審査員)《救世太子》杉本宗一(招待)《防人》長沢幸夫(無鑑査)《或る日の白隠》平野富三[富山]《想姿》鈴木福富《蘇鉄蠟燭染屏風》芹澤銜介(無鑑査)《型染の帯(紙漉)》二橋美衡(元審査員)《彫金鶏置物》(出品目録)
- 10/17 朝倉文夫《江原素六像》供出社行式。(読売静岡・遠州版9/15\*、静岡7/10)
- 11/20 東京会秋季展於東京牛込末よし(-22)。中村岳陵《柿》秋野不矩《菊》(市井)
- 11/23 日本民芸協会県支部献納作品展覧会於田中屋(-28)。(毎日静岡版11/25)
- 11/24 三越新作日本画展於東京日本橋三越(-28)。中村岳陵《秋声》(市井)
- 11/25 北川民次、瀬戸市に転居。
- 11/ 小室翠雲、熱海に滞在。(読売静岡版11/26)
- 12/3 維新勤皇烈士遺墨展於田中屋(-13)。(静岡12/4)
- 12/4 「文化運動の展開」(静岡12/4)
- 12/6 東西新作日本画鑑賞会於東京銀座資生堂(-8)。秋野不矩《秋》(市井)
- 12/8 第2回大東亜戦争美術展於東京都美術館(-S19.1/9)。

- 審査員:澤田政廣他。(朝日9/25.11/3)
- 藤本東一良《駆潜艇の活躍》(朝日12/13)
- 藤本東一良(海軍報道班員)《駆潜艇の活躍》漆畑廣作《工術》梅原英子《入営の家》二重作龍夫《大陸の鎮め》澤田政廣(審査員)《天駆ける神》(出品目録)
- 12/8 日本航空美術協会彫塑部《山本五十六元帥像》除幕式於土浦航空隊。制作に水野欣三郎、澤田政廣、和田金剛参加。(朝日10/29.11/8.12/9)
- 12/8 渡辺長男《井上馨像》供出される。(読売静岡版11/28\*、毎日静岡版11/28)
- 12/17 曾宮一念、第3回野間賞受賞。(美術年鑑S19・20・21)
- 12/17 名家色紙半折工芸品頒布会於東京松屋(-18)。(朝日12/18.19)
- 12/18 県文化職能団連絡会議。(静岡12/4.17)
- 12/ 赤城泰舒、鹿島神社取材。(日本版画no.132)
- 昭和19年 1944**
- 1/4 静岡県翼賛書道連盟静岡協会国防献金報国書道展於松坂屋(-5)。(静岡S18.12/31)
- 1/5 富士宮油絵報国展覧会於ヨロツヤ屋跡(-9)。(静岡1/11)
- 1/8 赤城泰舒、日本版画奉公会理事となる。
- 1/11 中一彌、富永謙太郎来静、静岡新聞周智支局訪問。(静岡1/8)
- 1/20 美術工芸統制協会県支部設置協議会於葵文庫。2月創立総会予定。(静岡1/20)
- 2/5 第40回太平洋画会展於東京都美術館(-20)。杉本宗一(会員)《農婦》鈴木満(会員)《第一線》相曾秀之助《勤労の少女》(出品目録)
- 2/6 第21回白日会展於東京都美術館(-19)。山道栄助《あやめ》(朝日2/13)山道栄助《ほとん》《あやめ》塩澤祥悟《天神原》島田四郎《つわもの達》《花園の隅》(出品目録)
- 2/23 第14回独立展於東京都美術館(-3/15)。遠藤君雄《木造船》影山静子《林》山道栄助(会友)《早朝鍛錬》《草相撲》八木昌一《富士》(出品目録)
- 2/23 第12回旺玄社展於東京都術館(-3/6)。

- 甲賀義成《大井連山》《朝の浜》(静岡3/3)
- 2/27 興亜写真報国会伊東支部出征家族慰問撮影。(静岡2/28)
- 3/ 久能山東照宮、日枝神社、国宝に指定される。(静岡3/1)
- 3/7 大楠公遺品宝物展於沼津市公会堂(-9)。(静岡3/5)
- 3/8 陸軍美術展於東京都美術館(-4/5)。吉野不二太郎《女身戦列》入選(静岡3/14)細井繁誠《大場鎮突破》出品。(静岡2/19)吉野不二太郎《女身戦列》細井繁誠《大場鎮突破》鈴木満《学徒出陣》中村岳陵(会員)《鷲進(輸送取調)》(出品目録)
- ・ 甲賀義成。日満華交換画を企画。(静岡3/11)
- 3/ 北村西望《橘周太像》供出予定。(静岡2/19)
- 3/17 第31回光風会展於東京都美術館(-30)。石川欽一郎《多摩早春》《古城》《台湾郊外》藤本東一良(会友)《老人》(出品目録)
- 3/18 県翼賛文化連盟総合展於松坂屋・田中屋(-23)。(静岡3/17)
- 3/19 県翼賛文化連盟発会式於静岡市公会堂。(静岡3/17)
- 3/ 佐藤直身、千駄奉彫を発願。(静岡3/31)
- 4/6 第19回国画会展於東京都美術館(-19)。東克己(会友)《生駒の秋》《松林》柏木俊一(会員)《古城社》日下泰輔《討夷》渋川駿二(会友)《富士雲影》二重作龍夫《蔵兵衛さんの家》山口源《山裾の花》(出品目録)
- 4/4 北村西望《橘周太像》、《関屋連隊長像》閉魂式。(静岡2/19.4/15)
- 4/5 《乃木希典大将像》石像除幕式於金谷町国民学校。(静岡4/7)
- 4/7 第22回春陽会展於東京都美術館(-18)。青木達弥《早春賦》井上重生《海の見える風景》小栗哲郎(会友)《山池早春》中村万平《S子像》(出品目録)
- 4/14 第4回一采社展於東京銀座資生堂(-18)。野島青茲他。(資生堂)
- 4/21 都築真琴内示展於銀座渡辺版画店。(美術年鑑S19・20・21)
- 4/23 白衣勇士芸術作品展於松坂屋(-30)。(静岡4/22)

- 4/24 絵画報国会慰問席上揮毫(-30)。(静岡4/21)
- 4/ 前田千寸『色彩文化史』脱稿予定。  
(静岡2/16,17)
- 5/ 萩原正司、都田へ疎開。(静岡5/10)
- 5/3 第31回日本水彩画会展於東京都美術館(-15)。
- 5/ 県美術工芸協会、県美術工芸統制会に改組。  
(静岡4/21)
- 5/17 第8回海洋美術展於東京都美術館(-6/9)  
石川欽一郎《題不明》漆畑廣作《題不明》吉野不二太郎《題不明》(朝日5/17)  
藤本東一良《怒涛を侵し哨戒に就く》
- 5/17 第7回大日本美術院展於東京都美術館(-30)。  
平口勝雄《熱國鳥糞》(美術年鑑S19・20・21)
- 5/27 赤城泰舒水彩画近作展於東京銀座資生堂(-30)。  
(資生堂)
- 6/2 第12回日本版画協会展於東京府美術館(-11)。  
小泉癸巳男(会員)《白雲去来》《新雪の不二》《中澤先生寿像》《静岡県護国神社》山口源(会員)《石榴》《防空頭巾の童》(出品目録)
- 6/3 連立春季彫刻展於東京府美術館(-18)。  
澤田政廣《聖観音》(美術年鑑S19・20・21)
- 6/11 海野美盛《市川紀元二像》供出壮行式。  
(静岡6/7,13)
- 6/ 曾宮一念、富士市に疎開。(美術no.7[みづゑno.447],朝日8/25)
- 7/3 献納絵馬展於浜松実業倶楽部(-5)。(静岡7/4)
- 8/ 細井繁誠作品、県及び護国神社に奉納。陸軍省から依頼の二百号に取り掛かる。(静岡8/5)
- 8/ 神谷互《頭山満像》制作。(静岡8/13)
- 9/ 秋野不矩《童女図》二俣高女に寄贈。(静岡9/10)
- 9/21 高木千蒼《山本五十六元帥像》開眼式於三番町小学校。(静岡9/24)
- 9/28 美術展覧会取扱要綱の発表。美術団体展中止。
- 10/7 大日本写真報国会沼津支部懸賞写真展於沼津市商工会議所(-9)。(静岡10/8)
- 10/9 澤田政廣、日本木彫家協会解散届提出。  
(朝日10/10)
- 11/5 現代刀匠新作日本刀展於松坂屋(-19)。  
(静岡11/5)
- 11/25 戦時特別文展於東京都美術館(-12/25)。  
小栗哲郎出品。(静岡11/25)

- 秋野不矩《騎馬戦》青木達弥《信州の秋》赤城泰舒《竹林山村》石川欽一郎《奥武蔵野》漆畑廣作《初の節句》小栗哲郎《氏神様》勝間田武夫《湍流》川合改次郎《稲の色》鈴木満《神芒》(未完成)曾宮一念《雨後》細井繁誠《〇〇兵舎》水野以文《神苑正気》山道栄助《孫》井戸義夫《雛鷺》澤田晴廣《天彦》杉本宗一《ヤア》和田金剛《破邪》稲木春千里《桑扇面硯画》二橋美衡《朝陽鷹之置物》(美術年鑑S19・20・21,出品目録)
- 12/7 東南海地震。竹内久一《掛川戦勝観音像》損傷。
- 12/18 赤城泰舒水彩画近作展観於東京銀座資生堂(-21)。(美術年鑑S19・20・21)
- / 山口源、沼津市江之浦に移り住む。

昭和20年 1945

- 1/9 尾崎元次郎逝去。享年78。(静岡1/11,12,朝日1/11)
- 2/ 和田金剛《勝又富作少尉像》原型完成。  
(静岡2/21,毎日静岡版S19.11/23)
- 3/10 東京大空襲。近藤浩一路他自宅焼失。
- 4/13 日本美術及び工芸統制協会県支部県決戦美術工芸展於松坂屋(-22)。(静岡4/15)
- 4/15 芹澤銈介、自宅焼失。
- 4/21 県下各紙、静岡新聞に統合される。  
(静岡3/14,4/21)
- 4/ 家財道具刀剣買上於田中屋。(静岡4/29)
- 5/ 楠公遺墨展於田中屋。(静岡5/17)
- 6/18 浜松空襲。
- 6/20 静岡空襲。
- 7/7 清水空襲。
- 7/17 沼津空襲。
- 7/20 野島青茲応召。9月福岡で除隊。
- 8/15 ポツダム宣言受諾。
- 9/2 降伏文書調印。
- / 曾宮一念、富士宮滝戸に疎開。(美術no.8)
- / 青木達弥、掛川に疎開。
- / 小泉癸巳男逝去。
- 9/10 石川欽一郎逝去。
- 9/ 静岡県日本画院結成於掛川旧竹ノ丸。柳田華外他。(静岡9/27)
- 10/15 木下奎太郎逝去、享年61。  
(美術年鑑S19・20・21,毎日10/7)

- 10/ 総合芸術派集団結成於吉原。(静岡11/21)
- 10/ 《興亜観音》改名の議論。(静岡11/25)
- 11/3 日本美術院小展覧会於東京三越(-10)。  
(毎日10/9)
- 11/20 写実派協会同人絵画試作展於田中屋(-24)。  
小栗哲郎絵画研究所を中心とする同人他、中川雄太郎、長阪舜次、斉藤千代出品。(毎日11/21)
- / 静岡県美術連盟結成於熱海大乘寺。1/13-17熱海市役所議場にて展覧会を企画。(静岡12/3)



# 収蔵品紹介 木版手彩色「富士山禪定圖」にみる富士山南麓の信仰空間

富士市立博物館 井上 卓哉

## はじめに

平成25年6月、富士山は世界文化遺産として登録された。その正式名称が「富士山・信仰の対象と芸術の源泉」であることから分かるように、富士山に対する信仰を示す文化財が、世界文化遺産を構成する資産の大部分を占めている。

この構成資産には、富士山の麓から山頂へと至る、「大宮・村山口登山道」、「須山口登山道」、「須走口登山道」、「吉田口登山道」の4種類の登山道が含まれている。それぞれの登山道には、基点となる信仰施設があり、それらの信仰施設と関係を持つ宗教者が中心となって信仰活動をおこなってきた。その活動の一環として、一般の庶民による登拝が盛んになった江戸時代には、参詣のために訪れる道者の利便や誘客に供する目的で、各登山道および周辺の宗教施設や名所旧跡、富士山へと至る道中を描いた木版刷りの登山案内絵図を数多く版行している。

なかでも、「大宮・村山口登山道」は、いずれも構成資産となっている富士山南麓の「富士山本宮浅間大社」を基点として「村山浅間神社」を経て山頂南側へと至る登山道<sup>1</sup>であるが、経由地である村山の地では、中世から江戸時代にかけて、村山浅間神社の前身である村山興法寺を拠点とする村山修験の活動がおこなわれていた。そして、村山興法寺が版行に携わるほか、版行に影響を与えたと考えられる登山案内絵図が遺されている。

富士市立博物館では、開館以来、こうした登山案内絵図を収集してきた<sup>2</sup>が、本稿では、この度新たに収集した、富士山南麓一帯を描いた木版手彩色「富士山禪定圖」について紹介をおこなうとともに、本図に描かれた情報を中心に、富士山南麓の信仰空間について概観してみたい。

## 1. 木版手彩色「富士山禪定圖」の全体像

本図は木版一枚刷りで、そのサイズは縦46.1センチ、横63.4センチである。

写真1に示したように、本図右上には、表題として「富士山

禪定圖」と記載され、東は原宿、西は三保の松原まで、南北は駿河湾から富士山頂にかけての富士山南麓の一帯が描かれており、村山興法寺を中心に道、川、山、宗教施設等とその注記や地名などがみられる。表1は本図に記載されている施設や注記・地名を拾い上げたものであるが、全体で92件の事項についての記載を確認することができた。また、こうした記載の中で、道、建造物、山地などには彩色が施されている。

さらに、図中の右上方、上方、左上方の余白部分には、以下に記すように、富士山出現の起源と異名、山頂の八葉嶽の名称、仏尊名が記載されている。



写真1 木版手彩色「富士山禪定圖」 富士市立博物館蔵

表1 富士山禪定図内の記載事項一覧

番号	名称	表現方法	番号	名称	表現方法	番号	名称	表現方法
1	岳宮センゲン(浅間)	森	31	油井	表記のみ	62	ヨコ子	森
2	須山センゲン(浅間)	表記のみ	32	(藪塚峠)	山	63	駒立	小屋
3	赤野クハンラン(観音)	堂舎1棟	33	興津	表記のみ	64	中宮	堂舎2棟・駒立の室を含む境内 (注記) 女人足マデ
4	(愛鷹山)	山と馬3匹 (注記) 初八新山後今山今愛鷹山行所アリ野馬九十九疋アリ	34	清見寺	山・堂舎1棟・楼閣1棟・森	65	岩清水	湧水
5	日吉宮	鳥居・森	35	清見方閑	門	66	牛ノ王子	小屋
6	原	表記のみ	36	キヨミカタ	表記のみ	67	矢立	小屋
7	柏原	表記のみ	37	三保ガサキ	砂州と林	68	龍ヶ馬場	小屋
8	浅間宮	堂舎1棟	38	羽衣松	樹木	69	高八丁山	山・森
9	浮嶋力原	沼・船2艘(2人乗船と3人乗船)・鳥9匹 (注記) 富士山八湖ノ内須津湖	39	三保明神	森・堂舎1棟	70	三段池	湧水
10	東海道	道	40	星山クハンラン(観音)	山・堂舎1棟	71	西ノ川原	小屋・石積み
11	八幡宮	鳥居・堂舎1棟・森	41	新福地	堂舎1棟 (注記) ㊸	72	タキ本	小屋
12	田子ノ浦	河口	42	大宮司	家屋11棟	73	イハヤフドウ(岩屋不動)	岩
13	今山今宮	鳥居・堂舎1棟・森 (注記) ㊹	43	浅間	森・堂舎2棟・湧水	74	泉水	湧水
14	新山新宮	堂舎1棟・森 (注記) ㊺	44	大宮司	堂舎1棟 (注記) 社家多シ天下御建立所	75	ヤクハノ木戸	門
15	吉原	家屋5棟	45	別當	堂舎1棟	76	茶ヤ	小屋
16	根方通	道	46	芝川	川	77	室大日	堂舎2棟・ヤクハノ木戸・茶ヤを含む境内 (注記) 等覺門往生寺
17	六所宮	鳥居・森 (注記) ㊻	47	白糸ノタキ	滝	78	中禪定道	道
18	日吉宮	森 (注記) ㊼	48	人穴	山・家屋3棟	79	宝永山	火口 (注記) 宝永四丁亥十一月廿三日ヤケ出シ十二月八日消ル砂石東國ノ方へ數十丈降
19	凡夫川	川 (注記) 参詣ノ者アゲコロバセウシシアケ	49	檜塚	森	80	行者堂	小屋
20	松岡	表記のみ	50	山宮	森・堂舎1棟	81	冠石	岩
21	米宮	堂舎1棟	51	鳥井木	樹木	82	仏生石	岩
22	富士山道	道標	52	安生山	山	83	不浄ガケ	小屋
23	水神	森・堂舎1棟	53	一本杉	樹木	84	砂フルイ	小屋
24	渡舟場	川の両岸にそれぞれ家屋1棟	54	大棟梁	それぞれ堂舎1棟と境内・森 境内周辺に家屋10棟	85	フジガクレ	小屋 砂フルイからフジガクレまでの間に 小屋2棟
25	岩本	家屋5棟	55	大日	(注記) 表惣本寺聖護院宮門跡村山 興法寺富士山別當三ヶ坊有諸堂社	86	穴ゴヤ	小屋
26	富士本道	道	56	浅間	天下御建立所	87	根石	岩
27	海	海	57	下向道	道	88	黒岩	岩
28	富士川	川	58	池西坊	境内周辺の家屋に含まれており、 判別できず	89	屏風岩	小屋
29	岩淵	表記のみ	59	大鏡坊	森・堂舎2棟	90	ヲマエ坂(御前坂)	道
30	蒲原	浜にて塩作りを行っている様子が描かれる	60	辻之坊	森・堂舎2棟	91	ヨコハタリ(横渡り)	道
			61	発心門	門・鳥居	92	表大日	鳥居・堂舎1棟

## 富士山出現の起源と異名

仁王六代孝安天皇九十二庚申年湧出  
 穀聚山 踰踰山 秘密琮祇金亀也  
 御影山 妙高山 来集山  
 天童山 不人山 四方山  
 般若山 養老山 不盡山  
 不老山 四面山 仙人山  
 影向山 七宝山 和合山  
 後山 蓮華峯  
 富士山 郡ノ名トス不二山トモ書

## 山頂の八葉嶽の名称

一ノ嶽 地藏  
 二 阿弥陀  
 三 観音  
 四 釈迦  
 内院兩界  
 曼陀羅  
 中央  
 胎藏  
 界大日

如来  
五嶽 弥勒  
六嶽 薬師  
七嶽 文殊  
八嶽 宝生如来

仏尊名

八葉九尊  
五智四菩薩  
五大明王五大力菩薩  
八大金剛童子  
一千二百餘尊  
開山役行者大菩薩

また、本図の左端には、「駿州富士郡元吉原」とあり、その右には、本図を描いたと思われる人物の落款が刷られている。

## 2. 富士山南麓の登山案内絵図諸本の発行意図と頒布

先にも述べたように、富士山南麓の登山案内絵図は本図だけではなく、いくつかの種類を確認することができる。これら諸本のなかには、絹本や紙本に手書きで描かれたものも存在する<sup>3</sup>が、ここでは、木版刷りで大量に発行されたと思われる案内絵図の比較を行い、本図の特徴を探ってみたい。

表2は筆者が確認することができた、江戸時代から明治時代にかけての木版刷の富士山南麓の登山案内絵図の一覧である。版元を確認してみると、その多くに村山興法寺とその三坊や大宮がかかわっていることがわかる。

こうした絵図を発行する目的として、絵図自体がルート案内の機能を持つものであることから、まず第一に富士山周辺に複数設けられている登山口の中で大宮・村山を通過する登山道を選択してもらうために用いられたということが考えられる。言い換えれば、そもそも道者を富士山南麓に招かなければ、この地域で宿泊代や山役銭(入山料)、草鞋や松明などの登山に必要な道具代などを得るといふ、登山にともなうさまざまな経済活動自体をおこなえないということになる。

次に、登山案内絵図は無料で頒布されていたわけではなく、それぞれの信仰施設や宿場などで販売されていたものである。先に述べたような宿泊代や山役銭などに比べれば金額的には少ないかもしれないが、信仰施設やそれに関する場所にとつての貴重な収入源であったこと想像できる。

さらに、各絵図に描かれた内容を比較してみると、村山興法寺とその三坊が版行に関わっている絵図では例外なく、村山興法寺が中央に大きく描かれており、大宮の富士山本宮浅間大社はそれに比べると簡素な描写にとどまっている。

その背景には、江戸時代を通じて大宮と村山との間で、大宮を通過するか通過しないか、つまり、大宮と村山のどちらの宿坊で道者に宿泊してもらうのかという地域内での争いが起こっていたことがある。この争いを示すものとして、富士川を渡った西国からの富士参詣の道者に対して、大宮を経由せずに、岩本からすぐに凡夫川を渡って直接村山へと通行することや、宿坊に対して道者の争奪を禁じた、寛文2年(1662)および寛政11年(1799)の制札<sup>4</sup>の存在が指摘されている(荻野 1999: 28、富士宮市教育委員会編 2005: 48-49)。

これらの制札はいずれも大宮側からの働きかけにより発行されたものであり、大宮側にとっては、相当数の道者を村山側に奪われ、経済的に問題を抱えた時期があったということを示している。

一方で、制札により大宮を経由することが正式なルートであると決められてしまった村山側では、いかに宿坊において道者を確保するのかということが課題として浮かび上がってきたといえる。

また、この時期村山では、西国からの富士参詣者が在地で垢離をとるだけで、実際には登山をおこなわなくなってきたということや、関東一円における富士講の隆盛にともなう、

富士山北麓の吉田口からの登山の増加の影響により、存続の危機を迎えていた(富士市立博物館 1995、荻野 1999)。

このような背景があり、道者の誘致と確保を目的として、村山興法寺とその三坊が版行に関わった登山案内絵図が多く発行された可能性が指摘できる。

では、こうした登山案内絵図はどのような形で頒布されていたのであろうか。その姿を知るものとして、尾張藩士の高力猿猴庵が天明6年(1786)に尾張から江戸に至る道中の様子を記した『東街便覧図略』という資料がある。その内容は絵図とともに、それぞれの絵図の解説や、絵図にかかわる場所の歴史書や紀行文、和歌や俳句などを紹介したものである。

その中の一つ、「元吉原」の項には、以下のような記載を確認することができる。

### 元吉原

此所にて富士山禪定の図并富士山略縁起を売店あり。家名を富士見屋といふ。其図中に曰。仁王六代孝安天皇九十二庚申年湧出云云。亦富士の異名を挙たり。穀聚山躡躡山秘密珍祇金亀也御影山妙高山来集山天童山不人山四方山般若山養老山不盡山不老山四面山仙人山影向山七宝山和合山後山蓮華峯等也其外八葉九尊の仏菩薩ことごとく誌せれと、事繁ければ爰にもしぬ。(以下略)

この記載とともに、富士見屋の店先が描かれている。店の中では、「富士山禪定圖」と記された軸の図が掛けられており、それを旅人とおぼしき人々が眺めている様子と、童子が旅人に何かを売りつけている様子が描かれている。

ここで掛けられている軸の図には吉原湊や浮島沼などが描かれていることが確認でき、当館で所蔵している肉筆画の富士山禪定図のようなものであったと考えられる(写真2)。ただし、この軸装の図を販売していたわけではなく、旅人が持ち運びしやすいようにこの図をベースにした刷物が販売されていたと思われる。

表2 富士山南麓の登山案内絵図諸本一覧

番号	表題	版行	法量	富士山略縁起	頂上八葉嶽名称	仏尊名	所蔵
1	富士山禪定図	駿州富士郡元吉原	46.1×63.4	あり	あり	あり	富士市立博物館
2	富士山禪定図	富士山村山 米津将監	48.5×65.8	あり	あり	あり	神奈川県立金沢文庫※1
3	富士山名所記	駿州富士郡元吉原 富士見屋	47.6×61.8	あり (ただし富士山の異名のみ)	あり	あり	神宮文庫※2
4	(富士山表口絵図)	村山興法寺三坊か	33.2×44.0	なし	なし	なし	富士市立博物館
5	三国第一富士山禪定図	富士山村山 大鏡坊	34.7×56.2 38.0×51.0	あり	あり	あり	小山町立図書館※2 信州大学附属図書館※3
6	駿河国富士山絵図	村山興法寺三坊	31.3×40.2 32.5×41.5 31.2×41.4	あり	あり	あり	富士市立博物館 富士市立博物館 信州大学附属図書館※3
7	富士山名所之図	村山興法寺三坊か	31.1×40.1	あり (ただし富士山の異名のみ)	あり	あり	神宮文庫※2
8	富士山表口真面之図	村山興法寺三坊	46.3×64.3	なし	なし	なし	神宮文庫※2
9	富士山表口真面之図	No.8の改版(明治13年)	42.5×69.5	なし	なし	なし	富士宮市教育委員会※4
10	駿河国富士山表口略図	藤田興市郎(明治11年)	41.2×63.7	あり	なし	なし	信州大学附属図書館※3
11	駿河国富士山表口全図	藤田興市郎(明治11年)	48.5×66.0	あり	なし	なし	富士市立博物館
12	駿州吉原宿絵図	吉野保五郎(文政10年)	33.0×42.8	なし	なし	なし	富士市立博物館
13	富士山表口正面図	駿州大宮神田橋(明治期)	45.4×71.7	なし	なし	なし	個人蔵※2
14	駿河国富士山表口図	富士郡大宮町金明堂	42.7×59.2	なし	あり	なし	富士吉田市歴史民俗博物館※2

※1 神奈川県立金沢文庫編 2003 『寺社縁起と神仏霊験譚』を参照

※2 富士吉田市歴史民俗博物館 2000 『富士山登山案内図』を参照

※3 信州大学附属図書館 近世日本山岳データベース(<http://moaej.shinshu-u.ac.jp/>)を参照

※4 富士宮市教育委員会編 2005 『村山浅間神社調査報告書』を参照





写真2 「富士山禪定圖」(肉筆画) 富士市立博物館蔵

そして、猿猴庵が「東街便覧図略」の中で取り上げ、おそらく手にいれたであろう登山案内図として考えられる資料として、本図(表2-1)および、金沢文庫本「富士山禪定図」(表2-2)、神宮文庫本「富士山名所記」(表2-3)が挙げられる。ここで取り上げる3点は、描かれている内容はほぼ同じであり、同じ下絵をもとに版が作られたと考えられるが、表題・富士山の略縁起・版元の三箇所に関して違いが見られる。

まず、表題に関しては、本図および金沢文庫本が「富士山禪定図」となっているのに対して、神宮文庫本については、「富士山名所記」となっている。

次に、富士山の略縁起に関しては、本図および金沢文庫本では、「仁王六代孝安天皇九十二庚申年湧出」の文言と富士山の異名が記されている。一方、神宮文庫本については、「仁王六代孝安天皇九十二庚申年湧出」の文言はなく、富士山の異名だけの記載にとどまっている。

最後に、版元について確認してみると、本図は「駿州富士郡元吉原」と記され、金沢文庫本では「富士山村山 米津将監」と記されている。神宮文庫本では「駿州富士郡元吉原 富士見屋蔵版」となっており、猿猴庵が禪定図を売っている店として記載している富士見屋の名前が登場している。なお、本図と神宮文庫本に関しては、版元の脇に刷られている落款は同じ人物のものであることが確認できる。

ここで、もう一度猿猴庵の記載に立ち戻ってみると、本図は表題・略縁起の記載が一致し、版元については地域名だけにとどまっているものの、その場所は富士見屋があった元吉原となっている。一方、金沢文庫本に関しては、本図と同

様に表題・略縁起の記載は一致するが、版元は元吉原の富士見屋ではなく、村山の人物となっている。そして、神宮文庫本に関しては、版元は元吉原の富士見屋ということで猿猴庵の記載と一致するが、表題・略縁起に関しては猿猴庵の記載との齟齬がみられる。

以上の比較から、本図が天明6年(1786)に猿猴庵が東海道を旅した際に見聞した禪定図であった可能性が非常に高いのではないかと考えられる。

### 3. 富士山南麓の信仰空間を旅する

前項では、本図が高力猿猴庵が手に取った富士山の禪定図であった可能性が高いことを指摘した。

そこで、ここでは本図をもとに当時の道者が歩いた富士山参詣の道中を辿ってみたい。あわせて、筆者が平成17年および平成19年、平成20年に参加した大宮・村山口登山道の現地踏査の記録をもとに、踏査当時の状況について部分的に紹介したい。なお、大宮・村山を通過して富士山頂へと至るルートは、西国の道者による利用が多かったことから、ここでは西から富士山へ向かった場合を想定している。

#### 街道を進む

西国から東海道を東に向かい、駿府を發つと本図に描かれた空間の中へと入ることとなる。東海道の右手には、羽衣伝説で知られ、世界文化遺産の構成資産である三保の松原が描かれている。ここには、「三保明神」(現在の御徳神社)と三保明神の御神体であり、天女が舞い降りて羽衣をかけたとされる「羽衣松」の記載が見られる。富士山へ向かう道者は三保へ立ち寄り、当時は松に覆われていたという松原から、これから登る富士山を眺めたのかもしれない。

その後、古代・中世の関所であり、景勝地としても知られた「キヨミカタ」(清見湯)を一望する「清見関」と、徳川家康に縁深い「清見寺」を経て「興津」・「油井」(由比)・「蒲原」の各宿場を通過して間宿である「岩淵」(岩淵)へと至る。またかつて油井と蒲原の間の浜では揚浜式の塩作りが行われており、本図でもその様子が描かれている。

#### 山麓を進む

岩淵で渡船に乗って「富士川」を渡った先は「水神」の森である。ここには富士山への33度の禪定を果たした遠江国の鈴木善左衛門が、宝暦8年(1758)に建立した「富士山道」と刻まれた道標が現在でも遺されている(写真3)。道標自体は後年に水神社の境内に移設されたが、本図にも道標が描かれており、道者の目印となっていたのであろう。



写真3 「富士山道」の道標(富士市松岡水神社境内) 写真提供:富士市文化振興課

村山興法寺とその三坊にとってみれば、ここから凡夫川(現在の潤井川)を渡って直接村山へ道者を導いた方が望ましいルートであったが、先にも述べたようにそのルートは制札により禁じられていた。そのため、本図では水神から北上し「岩本」・「星山」を経て「大宮町」へ至るルートが描かれ、さらにそのルートには「富士本道」と注記されている。また、大宮町の手前には、富士郡の下方(南側)に所在する五つの浅間神社(下方五社)の一つである「新福地宮」(現在の入山瀬浅間神社)が記されている。

本図では、大宮町に11軒の家屋が並ぶ様子が描写されており、富士山南麓では最も大きな規模の町並みであったことが窺える。道者は大宮町の西にある富士山本宮浅間大社を訪れ、本図に描かれている沸玉池にて垢離をとって身を清め、これからの登山に備えていたのであろう。

大宮町から富士山へと向かう道者であるが、おそらくひときわ目立つ杉の木が立っていたであろう「一本杉」を過ぎて、村山興法寺へと到着することとなる。村山興法寺を構成する「大棟梁」権現(平安時代に村山を開いたとされる末代上人を祀る場所)、「大日」堂、「浅間」社に参拝した道者は「発心門」をくぐって、いよいよ富士山の山中へと足を踏み入れていく。

#### 山中を進む

村山興法寺を發った道者は「ヨコ子」(横根か)、「駒立」と記載された場所を経由し、「中宮」(中宮八幡堂)へと到着する。本図には中宮の注記に「女人コレマデ」とあり、当時、

女性はこの場所までしか入ることができなかったことがわかる。また、現在当館において総合調査を実施している六所家旧蔵の『富士山大縁起』という資料に所収されているかぐや姫の説話では、この中宮が富士山の岩窟へと入るかぐや姫と翁の最後の別れの場所であったとされている。

明治期中宮を撮影した古写真では、茅葺屋根の堂舎等が確認できるが、現在では当時の建物は現存しておらず、堂舎のあった場所に石祠が祀られている。

また、本図内、中宮の脇には「岩清水」とあり、水が湧いている様子が描写されている。登山道沿いで岩清水より標高の高い場所において水場の記載がないことから、山頂へ向かう道者にとっては貴重な水場の一つであったことが想像できる。現在、中宮の周辺には水が湧いている場所はないが、中宮の北側に水の神様である八大龍王を祀る石造物があり、ここが岩清水と呼ばれる場所であり、道者が喉を潤したのかもしれない。

中宮から、「矢立」、「龍ヶ馬場」、「西ノ河原」と呼ばれる場所を過ぎると「タキ本」(瀧本)に到着する。これまでの踏査では、標高約1680メートル付近の倒木帯の中に、4基(地藏3体、不動明王1体)の石造物が遺されていることを確認しているが、このうちの不動明王の石造物には、「文化六己巳年 富士山表口瀧本前不動明王 施主■■■大願成就世話人 八月廿八日 木切 山上村 定七」と刻まれている。このことから、石造物が移されていないければ、石造物が発見された一帯が瀧本と呼ばれる場所であったといえる。

なお、ここで発見された石造物はいずれも頭部が切り離されており、富士山中においても明治初期の廃仏毀釈の影響が大きく及んでいたことが窺える。

本図では、タキ本から東へ伸びる道が描かれ、その先には「イハヤブドウ」(岩屋不動)の記載と、岩の間を流れ落ちる滝の描写が確認できる。ここは、村山を開いたとされる末代上人が登山の際に修行を積んだ場所であるとされ、村山の修験者たちが富士山中で行う修行(富士峯修行)の行場の一つであった。それとともに、文化13年(1816)から天保5年(1834)にかけて新庄道雄が記した「駿河国新風土記」には、板葺の建物があり、登山者の休憩場所になっていたことが記されている(新庄 1975:917)。

現在、岩屋不動の正確な場所は判明していないが、平成19年には、岩屋不動の候補地の一つとされる場所の踏査を実施している。この踏査の際には、瀧本と考えられる場所から北東方面にトラバースした標高約1820メートルの崖状に

なった場所において、地上から約7メートルのところに、高さ2メートル、幅6.4メートル、奥行き9メートルを測る洞穴を確認している。洞穴の入口付近は崩落が激しく、内部には修行の痕跡を示すようなものは遺されていなかったが、長さ13.6センチ、厚さ0.2から0.3センチを測る鉄製利器を1点確認することができた。

少し横道にそれたが、タキ本からさらに上ると、前掲の『駿河国新風土記』に、登山手形を改めたり、草履を取り替えた場所として記されている「ヤクバノ木戸」をくぐって「室大日」と呼ばれる場所に至る。室大日は堂舎とともに境内地も描かれており、ある程度の平地に立地した施設であることが見て取れる。それとともに、「茶ヤ」と注記された建物なども描かれており、道者にとっての休憩施設も有していたことがわかる。『駿河国新風土記』には、新庄道雄も堂の西の小屋にて一泊しており、夜の寒さが耐えがたかったことを述べている(新庄1975:917)。

さらに、室大日の脇に「等覚門往生寺」という注記を確認することができる。金沢文庫にて発見された「浅間大菩薩縁起」という資料の奥書に、建長3年(1251)に滝本往生寺<sup>5</sup>にてこの縁起を書写したと記されていることから、室大日の別名が往生寺であり、この場所が少なくとも鎌倉時代から存在していたとする指摘もある(神奈川県立金沢文庫編 2004:37)。

室大日についても、正確な場所は不明であるが、標高約2170メートルの場所に、明らかに人工的に造成された平場を踏査時に確認している。平場の入口には石段が残存しているほか、平場を造成するために設けられた石垣についても一部確認することができた。さらに、平場中央やや西に護摩壇と思われる石組みも確認されている。これらのことから、この場所については室大日の候補地として考えられている。

室大日の跡と思われる場所を過ぎてしばらくすると、森林限界を越えて周囲の景色は一変し、山頂をはっきりと望むことができるようになる。山頂を望みながら歩みを進めた道者たちはほどなく、「行者堂」とよばれる場所へと到着することとなる。

本図では、行者堂の東西に「中禪定道」と注記された道が描かれているが、これは富士山中腹を一周するいわゆる御中道(現在は一周することはできない)であり、この行者堂が現在の六合目付近に存在していたということを推測することができる。

ここから山頂の「大日堂」へ至る道中は、現在の登山道と

ほぼ同じであるが、本図内には「不浄ガケ」、「砂フルイ」、「フジガクレ」、「根石」、「穴ゴヤ」、「屏風岩」、「マエエ坂」、「ヨコハタリ」の記載とともに、八つの室が描かれている。ここからは、道者たちがそれぞれの室で一息つきつつ修行をおこないながら、少しずつ山頂へと進んでいった姿が浮かび上がってくる。

なお、山頂の表大日の手前には鳥居が描かれているが、前掲の『駿河国新風土記』に「頂に木の鳥居あり、此鳥居は庵原郡岩淵村なる講中といふもの建てしなりとぞ」(新庄1975:919)とあり、ここで述べられている鳥居のことを指していると思われる。この鳥居の奉納は、現在でも岩淵の人々によって構成されている鳥居講という講集団によって、12年に1度巡ってくる申の年に新調するという形で続けられている(写真4)。



写真4 岩淵鳥居講中によって奉納された鳥居(大正から昭和初期) 富士市立博物館蔵

この行事の由来には、岩淵は富士川の渡船によって生活を営んできた集落であり、船の材を富士山麓から得ていたことに対する返礼であるといったことや、申の年には荒れるといわれている富士川の流れを鎮めるためであるといった諸説がある。

#### 山を降りる

山頂に到着した道者は、これまでに確認されている西国の道者が道中の様子を歌にした参詣道中歌によれば、大日堂に参拝した後、山頂の火口を一周するお鉢めぐりをおこない、その途中で御来光を拝んでいる。その後、山梨県側の吉田口へと下山し、善光寺などに参拝する物見遊山的な場

合もあつたようだが、一般的には登山と同じルートで下山し、村山にて宿泊したとされる(富士宮市教育委員会 2005:116-123)。

本図では、村山で宿泊した後、「下向道」と注記された、大宮町には向かわずに直接岩本、水神へと向かう道が描かれている。この道中には、「凡夫川」(現在の潤井川)を渡る橋が描かれており、注記に「参詣者アゲコリバ セウシヤケ」(上げ垢離場 精進明け)とある。

この垢離場については、文政3年(1820)に桑原藤泰によって編まれた『駿河記』内の潤井川の項に、「大宮浅間の御手洗川合流して瀧戸に至て磐石かさなりて山の如し。岩間に落る白浪は井堰にかかる雪かと疑ふ。此瀧の下を凡夫川と云。上方より富士参詣の道者爰にて垢離を取り、精進を退て國にかへるといへり。」(桑原 1974:306)とあることから、現在では富士市内で桜の名所として知られる潤井川の龍巖淵と呼ばれている場所周辺であったと考えられる(写真5)。



写真5 絵葉書『富士十勝 其五 龍巖淵ノ富士』(明治後期から大正初期) 筆者蔵

凡夫川にて垢離を取った道者は再び富士川を渡って帰路につくことになる。三重県の南伊勢町田曾浦に伝わる富士参詣道中歌の分析によれば、伊勢からの富士参詣は12日間の行程であったようで、往路・復路ともかなりの強行軍であった様子が窺える(富士宮市教育委員会 2005:117)。

#### おわりに

本稿では、江戸時代に版行された富士山の登山案内絵図の一つである木版手彩色「富士山禪定圖」について、その資料の特徴および、記載内容から、登山案内絵図の発行意図と頒布についての検討をおこなった。また、本図の記載内容から、西国からの富士参詣の道者の道中を辿るとともに、道中の一部については、これまでの踏査の記録から現在の状況について取り上げた。

現在、富士山の南麓では、標高2400メートルの富士宮口五合目まで自動車道が整備されており、そこへ至る道中を歩くということはほとんどない。また、村山興法寺とその三坊が衰退していく中で、富士山へ参詣するという行為自体が消滅し、富士山とその裾野に広がる信仰空間や参詣道の認識は非常に困難な状況となっている。

しかしながら、本図一枚をとっても、そこには参詣の道中に関する膨大な情報が詰め込まれている。これらの情報をおよぼすの富士登山に関する各種の記録類と突合せていくことにより、当時の信仰空間や信仰活動についてある程度は明らかにしていくことが可能といえる。

さらに、本図には道中から離れた場所にも多様な記載や描写がみられる。このことは他の登山案内絵図の多くでも共通した特徴であるが、これらは単に空間を埋めるためだけの目的ではなく、絵図の発行主体や参詣者にとって必要なものであるからこそ盛り込まれた情報であり、富士山の信仰空間を構成する重要な価値を有していたということが考えられる。

したがって、本図を含めて各種の登山案内絵図に盛り込まれた情報についてつぶさに確認、比較することで、かつての信仰空間をより具体的に描き出すことができる可能性がある。このことはまた、世界文化遺産に登録された、信仰の対象と芸術の源泉としての富士山の普遍的価値を、将来にわたって伝えていくという使命に対して貢献することのできる一つの方法であるといえよう。



- 1 資産の範囲は現在の富士宮口登山道の六合目以上。
- 2 富士市立博物館において収蔵している富士山の登山案内絵図については、富士市立博物館ホームページ内の収蔵品紹介ページをご覧ください。  
(<http://museum.city.fuji.shizuoka.jp/index.php>)
- 3 「三国第一富士山禪定図」(江戸時代・個人蔵)、「富士山社堂行所図」(江戸時代・個人蔵)、「吉原宿田子之浦絵図」(江戸時代・個人蔵)、久能文庫所蔵『駿府風土記』内の富士山絵図(江戸時代・静岡県立中央図書館蔵)、内閣文庫『駿府明細記』内の富士山絵図(江戸時代・国立公文書館蔵)、「富士山禪定図」(江戸時代・富士市立博物館蔵)。  
このうち、個人蔵の三点については、『富士山登山案内図』(富士吉田市歴史民俗博物館 2000)を参照し、久能文庫および内閣文庫の二点については、『資料紹介『駿河風土記』の「富士山禪定図」』(矢島 2012)を参照した。
- 4 寛文2年および寛政11年の制札はそれぞれ2枚づつあり、大宮と岩本に建てられている。岩本に建てられた制札には、先年からの定めとして富士参詣の道者は凡夫川をすぐに渡ってはいけないうこと、岩本の人々は凡夫川に向けての駄賃を取ってはいけないうこと、凡夫川を無理に渡ろうとする道者がいれば岩本の住民は取り押さえて大宮へ向かうようにさせることが記されている。一方、大宮に出された制札では、道者は大宮の坊に宿泊すること、坊では宿泊する道者の数を誤魔化さないこと、道者と坊の間で採め事を起こさないことが記されており(浅間神社社務所編 1973:242)、制札が出されるということは、上記の禁止事項が日常茶飯事であったことが窺える。  
また、寛政11年に大宮・岩本に出された制札はそれぞれ寛文2年の内容と同じであり(浅間神社社務所編 1973:412)、寛文2年の制札の効果が限定的であった様子が見て取れる。
- 5 富士山に関する各種縁起によれば、往生寺は末代上人が建立した寺とされる(神奈川県立金沢文庫編 2004:37)。

## 引用・参考文献

- 井上卓哉  
2006 「富士山村山口登山道の現状について」『富士市立博物館 館報』平成17年度:66-82 富士市立博物館
- 荻野裕子  
1999 「富士山南口案内絵図-村山修験者と富士南麓登山」『富士市立博物館 館報』平成10年度:23-30 富士市立博物館
- 大高康正  
2012 『参詣曼荼羅の研究』岩田書院
- 大高康正  
2013 『富士山信仰と修験道』岩田書院
- 神奈川県立金沢文庫編  
2003 『寺社縁起と神仏霊験譚』神奈川県立金沢文庫
- 桑原藤泰  
1974 『駿河記』臨川書店
- 児玉幸多監修  
1994 『東街便覧図略 伊豆・駿河・遠江の部』羽衣出版
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所編  
2009 『大宮・村山口登山道』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所編
- 新庄道雄  
1975 『修訂 駿河国新風土記』国書刊行会
- 浅間神社社務所編  
1973 『浅間文書纂』名著刊行会
- 富士市立博物館  
1995 『富士山信仰と富士塚』富士市立博物館
- 富士宮市教育委員会編  
1993 『富士山村山口登山道跡調査報告書』富士宮市教育委員会
- 富士宮市教育委員会編  
2005 『村山浅間神社調査報告書』富士宮市教育委員会
- 富士吉田市歴史民俗博物館編  
2000 『富士山登山案内図』富士吉田市教育委員会
- 矢島一  
2012 「資料紹介 『駿府風土記』の「富士山禪定図」」『葵』46号:66-69 静岡県立中央図書館

## 磐田市旧見付学校「昔の授業体験」

磐田市教育委員会文化財課 副主任 高畑裕美

### はじめに

磐田市旧見付学校は、明治8年(1875)に建てられた現存する日本最古の木造擬洋風小学校校舎です。現在は教育資料館として、明治以降の教科書や学習用具、教具・教材等の展示をしています。1階には、昔の教室風景を再現した部屋があり、一歩足を踏み入ると、まるで明治時代にタイムスリップしたかのようです。実際に、木の椅子に座ったり、石盤に文字を書いたりすることができます。この教室では、毎年夏休みになると、「昔の授業体験」と題し、小学生たちが緋の着物を着て、明治時代の授業を体験する事業が行われます。今年で21回(年)目の開催となりました。

### 事業概要

- ◆趣 旨: 緋の着物を着て、石盤・石筆を使い、明治・大正期の授業を体験する。昔の授業と現代の授業の違いや遊びについて学んでもらう。  
2時限構成。全学年混合で行う。
- ◆内 容: 1時限目「国語の授業」(講師:旧見付学校嘱託職員)  
2時限目「昔の暮らし体験、遊び体験」(講師:旧見付学校ボランティア14名)
  - 昔の暮らし体験…石臼できな粉を作る／洗濯板を使って洗濯をする
  - 昔の遊び体験…紙でつぼう／紙ひこうき／水でつぼう／紙とんぼ
- ◆開催日時: 平成25年8月1日(木)／8月22日(木)  
両日とも9:00～11:30
- ◆対 象: 小学校1年生～6年生(市内外問わず)
- ◆参加者数: 8月1日…33名／8月22日…37名
- ◆参加費: 500円
- ◆当日のスケジュール
 

9:00	受付開始	受付後、緋の着物に着替える
9:30	始めの式	
9:40	写真撮影	
9:50	1時限目(40分間)1班「国語の授業」、2班「昔の暮らし体験、遊び体験」	
10:40	2時限目(40分間)2班「国語の授業」、1班「昔の暮らし体験、遊び体験」	
11:20	終わりの式	着替えて解散

### レポート

受付で「就学札」を配布します。就学札とは明治時代に見付学校に通っていた児童に配布されていたもので、当時は就学の証明であるとともに栄誉の象徴でもあったそうです。「昔の授業体験」では、それを復元したものを用意し、参加者に配布しています。

教室には、緋の着物に赤や青の帯をしめ、かわいらしい姿に変身した子どもたちが続々と集まってきます。待ち時間を利用して、旧見付学校ボランティアが弾くオルガンにあわせて、「茶摘み」や「富士山」などの唱歌をみんなで歌います。はじめは恥ずかしがって小さな声だった子どもたちも、だんだん大きな声になっていきます。そして緊張がほぐれたところで、「始めの式」。注意事項や当日のスケジュールを簡単に説明し、その後は、わざわざ履いて、見付学校玄関前で記念撮影をしました。当日は、磐田市のイメージキャラクター「しっぺい」も来てくれました。「しっぺい」と触れあっているのも束の間、カランカラーンと鐘が鳴ります、授業開始の合図です。ここからは2つのグループに分かれます。1班は教室に戻り「国語の授業」、2班は「昔の暮らし体験、遊び体験」です。

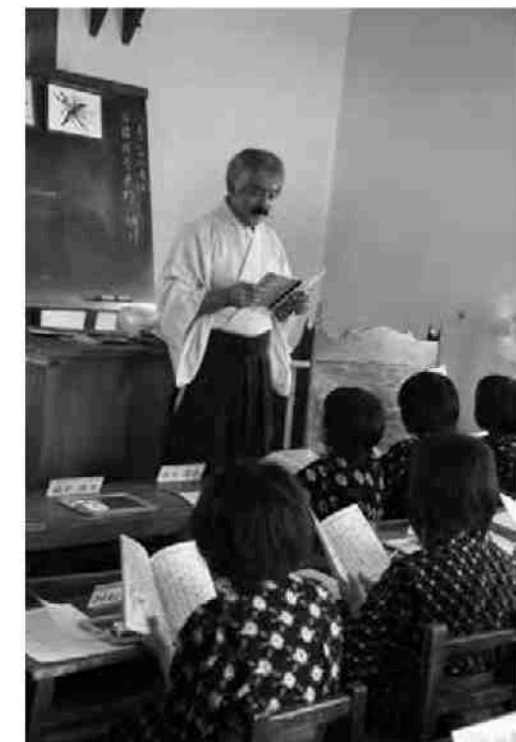


### 国語の授業

教室に袴を着た先生(旧見付学校嘱託職員)が入ってきます。はじめに、子どもたちに明治時代は今からどのくらい昔なのかを説明します。「それじゃあ、目をつぶってごらん。今からみんなで明治時代へタイムスリップするよ」と言うと、カランカラーンと力強く鐘を鳴らしました。「もう目を開けていいよ。みんな明治時代についたかな!？」目を開けると、目の前に立っているのは鼻の下にひげを生やした先生。明治時代らしくなっていたところで、あらためて授業スタートです。教科書の持ち方の指導に始まり、全員で教科書を読んだり、石盤に変体仮名を書いて練習したりしました。

使用している教科書は、旧見付学校職員のお手製で、毎年、当時の教科書の中から題材を選び、印刷製本しています。題材を選ぶ際には、明治時代の子どもたちがどんな授業を受けていたのか体感してほしい、そして、その題材を通していろいろなことを学んでほしいという思いで選んでいます。

低学年の参加が多いため、特に変体仮名は難しかったようで、昔はこんな難しいことを勉強していたんだねという声が多く聞かれました。





### 昔の暮らし体験、遊び体験

2班は4つのグループにわかれ、①【石臼できな粉を作る】②【洗濯板を使って洗濯をする】③【紙でつぼう・紙ひこうきで遊ぶ】④【水でつぼう・紙とんぼで遊ぶ】の4体験を各10分ずつでローテーション。講師は旧見付学校のボランティアの皆さんにお願いしました。

【石臼できな粉を作る】体験では、石臼やきな粉について説明をし、それから実際に子どもたちに石臼を挽かせ、出来上がったきな粉を少しずつ食べました。きな粉の良い匂いと挽きたてのおいしさに、子どもたちは大感激していました。

【洗濯板で洗濯をする】体験では、ボランティアの指導のもと、洗濯板でハンカチを洗い、水ですすぎ、干すまでの一連を体験しました。昔の人は手でこすって洗っていたから大変だったねという声が多く聞かれました。

遊びのコーナーでは、水でつぼうがとても人気でした。竹で作られたもので、ボランティアのお手製です。はじめはなかなか遠くへ水を飛ばせず苦労していましたが、ボランティアの指導を受けながら、徐々に上手になり、最終的には遠くまで水を飛ばすことができるようになりました。

昔の遊びを4種類ほど用意しましたが、子どもたちからはゲームはゲームで楽しいけれども、紙ひこうきや水でつぼうも楽しいという声がかれました。

最後は全員が教室に集まり、「終わりの式」です。旧見付学校職員が子どもたち一人ずつ名前を呼び、修業証書の授与を行います。この修業証書も開校当時のものを復元して用意しています。修業証書もらい、着替えて「昔の授業体験」は終了となります。



### まとめ

終了後のアンケートでは、全体的に楽しかった87%、「昔の暮らし体験、遊び体験」に限定すると、楽しかった93%という結果になりました。感想も、「昔のことがよくわかった」「また来年も参加したい」が多数あり、これも、内容に関して様々な工夫を凝らしてくれたボランティアの方々の協力があってこそその結果です。

また、今年度より、参加費として500円を徴収しました。これは、緋の着物のクリーニング代のみ負担をしていただきましょうという受益者負担の考えにより決定しました。参加費徴収により参加者が減るのではないかと心配しておりましたが、両日とも定員に達しました。中には無料を希望する声も聞かれましたが、ほぼ皆さまにご理解いただけたものと思います。

今後の課題としては、平均年齢73歳という旧見付学校ボランティアの高齢化があげられます。事業の継続を考えると、少しずつでもボランティアを募集、育成していく必要があると考えています。

また、「授業体験」の内容についても、明治8年に建てられた旧見付学校だからこそできるような、特色を生かした内容を検討していく必要があると思われます。

今年度初めてこの事業を担当しましたが、緋の着物を着た子どもたちがとてもかわいく、また、旧見付学校職員やボランティアの皆さんの話に、一生懸命耳を傾け、活動に取り組む姿に感心しました。そしてなんとといっても、子どもたちが暑さを気にせず、とてもイキイキとしていたのが印象的でした。

これからも、子どもたちが楽しみながら「昔のこと」を学べる事業になるよう、旧見付学校職員をはじめ、旧見付学校ボランティアと案を出し合いながら協力してやっていきたいと思っています。

## 学校と美術館の連携 —浜松市中学校美術部夏の写生大会を例に—

公益財団法人平野美術館 学芸員 松井 沙代子

### 館の概要

公益財団法人平野美術館は、美術をこよなく愛し、自らも絵筆をとった平野素芸と憲の父子2代にわたって収集してきたコレクションを基に、1989年5月14日浜松市に開館した美術館です。開館以来、「街に開かれた美術館」を基本理念とし、これまで、地元ゆかりのある作家の企画展や、近代日本画の収蔵作品展などを中心に開催してきました。

気軽に立ち寄ることのできる地域密着型の美術館として活動を展開していく中で、「地元作家の魅力について、もっと深く知ってもらいたい。」「美術の素晴らしさを積極的に発信し、体感してもらいたい。」「若手作家の活躍の場をもっと提供できないだろうか。」このような思いを、年々強く抱くようになりました。というのも、浜松市は、古くから「楽器のまち」として栄え、音楽に関する様々な文化施設の建設や、国際的な交流が積極的に進められている一方で、美術分野に目を向けてみると若手作家の活躍の場や、自らの作品を他者に訴える機会などが音楽分野と比べ少なく、市民が美術を身近に感じる事ができないという点が課題に挙げられていたからです。

このような危機的状況を受け、当館では近年、近隣の小学生における地域探検への協力(写真1)や、中学生を対象とした作品解説(写真2)など、市内の小中学校と連携を図りながら未来を担う子供たちに向けた美術教育に重点を置き、美術の魅力を発信してきました。しかし、もっと規模の小さな美術館ならではの活動ができるのではないかと、美術館そのものの役割を再考する日々が続いていました。

そこで、この度、静岡県博物館協会の地域セミナーの助成金を活用させていただき、未来を担う子供たちにも馴染み易い「動物」をテーマとした展覧会「アートにみる動物たち」展と、それと同時に開催いたしました浜松市中学生美術部夏の写生大会の優秀作品選抜展についてご報告いたします。



写真1 浜松市立北小学校2年生の地域探検の様子



写真2 浜松学芸中学校2年生への作品解説の様子

### 活動目的と活動報告

今回、開催するに至った展覧会「アートにみる動物たち」展は、児童生徒にとって興味関心を持ってもらえるようなテーマを取り上げることで美術館へまず足を運んでもらい、そこから美術を体感してもらう機会を創り出したいという強い気持ちから企画したものです。しかし、そもそも授業の一環で足を運ぶ程度である美術館に、どのようにすれば児童生徒が立ち寄りたくなるのか、試行錯誤が続きました。

実際、当館に来館する児童生徒の人数は展覧会来館者総数の1~5%程度と非常に低く、さらに、平均の滞在時間は20分程度と短いということが課題でした。その大きな要因として、彼らにとって興味関心のもてる魅力的な展覧会が開催できていない、あるいは、作品の見方や意味がわからない、美術館へ行くための時間と費用が工面できないなどといった点が挙げられます。これらの諸課題を解決すべく、1つ1つの出品作品に対して解りやすい解説を付け、展覧会の会期を小中学生の夏休みにあて、さらに土日に関り小中学生の入館料を無料とするなどの対策を講じました。また、浜松市内の中学生を対象として開催されている写生大会への事業協力を行い、その中から優秀作品の一部を当館の特別展示室「素芸洞」にて展示することを決めました。身近な知人友人の作品が展示してあると知れば、きっと喜んで見に来てくれるだろうとの思いからでした。そして、児童生徒を連れて来館される保護者の方にも、生徒たちの秘められた能力に触れてもらい親子の一体化を図ることが出来ればという願いもありました。

写生大会とは浜松市中学校文化連盟と浜松市中学校美術部が主催し、浜松市内の全ての公立中学校の生徒全員が参加をする大規模な大会です。毎年、夏と秋の年2回開催しており、今回で35回目となります。例年、夏の写生大会は浜松城公園で行い、秋の写生大会は浜名湖ガーデンパーク(以下ガーデンパーク)で行われてきましたが、今夏は、浜松城公園が改修工事中であったため、先にガーデンパークで開催されました。事業協力を行っている当館は、「平野美術館長賞」の提供や、優秀作品を描いた生徒たちに記念品などを授与しています。そして、「平野美術館長賞」をはじめとする優秀作品を、学校関係者より借用依頼し、当館の特別展示室「素芸洞」にて夏の写生大会作品選抜展2013(以下、選抜展)と題した展示会を開催しました。

今夏の写生大会は、7月6日の午前9時から開催されました。

30分余の開会式が終了すると生徒たちは早速制作に取り掛かります。生徒たちは、広大な敷地の中で自身が設定した制作テーマに合う写生スポットを決め、午後2時30分までの正味5時間という短い時間の中で、スケッチ、彩色、片づけまでを行います。完成に至ることのできる生徒ばかりではありませんが、限られた時間の中で自身の手腕を発揮する生徒も多くいます。写生大会終了後は生徒全員で園内の清掃活動を行い、ガーデンパーク内のトイレや流し場を綺麗にし、浜松市内の憩いの場を大切にするという郷土愛を育むという目的も含まれています。その後、見事に表現された作品群は、一枚一枚厳正な審査が行われ、そこで優秀作品が選定されます。浜松市内のすべての公立中学校を対象として行われるこの大会は、参加生徒数が有に1700名を超えます。

当館では、「平野美術館長賞」を含む優秀作品17点を特別展示室「素芸洞」にて展示しました。これらによって、当初の思惑どおり受賞生徒だけでなく、その友人知人や保護者をはじめ学校関係者が多く美術館に足を運んでくれるようになりました。また、偶然に立ち寄られたお客様からも、見事に表現された子供たちの作品を前に「すごく上手。印象派のモネの作品のようね。」「未恐ろしい才能だ。」「本当に中学生の作品なの。」などといった感想が寄せられ、これらの声が生徒たちの自信に繋がっていくのだと確信しています。ここで、展示した優秀作品のうち、「平野美術館長賞」を受賞した生徒の作品をご紹介します。(写真3)(写真4)(写真5)



写真3 浜松市立南部中学校1年 スズキアイリさんの作品





写真4 浜松市立南部中学校2年 袴田実樹さんの作品



写真5 浜松市立中部中学校3年 後藤田礼於さんの作品

一方、所蔵作品を中心に開催をした動物をテーマとした展覧会「アートにみる動物たち」展では、江戸時代の渡辺崋山が描いた「猛虎図(重要美術品)」から現代作家の描いた抽象的な動物画に至るまで、その変遷や軌跡を探りました。

この中では、浜松市在住の日本画家である栗原幸彦氏の描いた六曲一双の迫力のある屏風絵や、55歳の若さで惜しまれながらこの世を去った細江町出身の野島青菫の200号を超える風俗画など、地元作家の作品をあわせて出品をしました。地元作家の作品を多く出品したのは、美術を身近に感じてもらうだけでなく、地元浜松市にも素晴らしい作家さんが多くいらっしゃることを知っていただけたらと考えたためです。また、本展覧会の展示作品の中心を日本画と設定したのは、当館の所蔵作品の多くが日本画であるというものの勿論ですが、日本画独特の繊細で透明感のある色調や、端正な描線の素晴らしさなどを直に体感することで、小中学校では触れる機会の少ないであろう日本画の魅力や肌で感じ取ってもらいたいという思いからです。

現に、学校現場で美術の時間で使用される画材は、その使い易さからアクリル絵の具やパステル、美術部員で油彩を手掛けるのが一般的です。日本画については、画材の価格が高いこと、扱いや技法が複雑なことなどから、なかなか教育現場で生徒たちが作品を見る機会はありません。日本画の特徴は何と言っても岩絵具の美しさにあるため、その鉱物の輝きを生徒たちにも見てもらう場を提供できれば、少しでも日本画に興味を持ってくれるのではないかと期待していました。

実際、選抜展を鑑賞しに見えた生徒や保護者が、展覧会も一緒に鑑賞してくださり、作品の大きさに圧倒されるだけでなく、日本画独特の輝きを目の当たりにし、技法や顔料についてなど非常に多くの質問を受けました。こういった生徒の中には、「日本画やろうかな。」といった感想も聞くことができ、一つのきっかけを与えることができたのではないかと感じています。しかし、あらゆる可能性を秘めた子供たちの能力をどのような方法で体現できるかどうかは今後も模索し続けなければなりません。

これらの活動により「アートにみる動物たち」展では、これまで1~5%の水準で推移していた児童生徒の来館数が15.3%にまで改善しました。今後も、こうした規模の小さな美術館ならではの教育普及活動が展開できればと感じています。

おわりに

今回、報告させていただいた活動のうち写生大会や選抜展については、市内の中学校が主体となって取り組んでいる活動に美術館が事業協力を行うという、いわばサブ的な役割を担いました。平成の大合併を経て、市域の広がった浜松市では市内全域の公立中学生が参加することのできる活動はなかなかありません。だからこそ、このような取り組みを陰で支えていき、協力して推し進めていくということが必要なのです。

今後は、このような活動を継続していき教育機関を支えていらっしゃる現場の先生方と信頼関係を築き上げ、美術館と学校とが相互に連携を図りながら、それぞれの専門分野を生かして子供たちの美術に対する興味関心や能力を引き出すことが求められています。しかし、学校が美術館に求めている内容と美術館が生徒たちに伝えたい内容とが乖離している意味がありません。地域に根ざした活動を目的としている当館にとって、今回のようなアクションを起こしていくことが、密度の高い教育普及活動の実現に直結していくと確信をしています。

最後に、この度の活動にご協力いただきました浜松市内の美術教諭はじめ学校関係者様、ご支援いただきました静岡県博物館協会及び加盟館園に謝辞を申し上げ報告とさせていただきます。